

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.88
2006

2
月号

トピックス

北米地区同窓会設立

クローズアップ

ナノ高度学際教育研究訓練
プログラム



大阪大学広報誌

2006 2月号 No. 88

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウスPECIAL	14
キャンパスニュース	16
計 報	37
表 彰 等	38
人 事	40
名誉教授リレー随想	42
インフォメーション	44
インタビュー	48
海外レポート	50
私の本棚	54
ガイドマップ	55
交流協定大学紹介	56

表紙写真：工学研究科GSEコモン棟
撮 影：理学研究科助教授 山本 仁
表紙デザイン：株式会社ココティエ

北米地区同窓生との



記念講演会で講演する 松浦 功Bank of the West取締役顧問
(法学研究科客員教授)



交流会で説明する宮原秀夫総長

交流会・北米地区同窓会設立総会を開催

本学の海外教育研究拠点の一つであるサンフランシスコセンターの呼びかけにより、現在北米地区に在住する卒業生と大阪大学総長等との交流会並びに北米地区同窓会設立総会が、平成18年1月7日（土）にホテルニッコー・サンフランシスコにおいて、宮原秀夫総長をはじめ、鈴木 直理事・副学長、橋本日出男理事、辻穀一郎総長補佐等の出席のもと開催されました。

本交流会・設立総会の開催にあたっては、昨年7月に設立された同窓会連合会を通じ、各部署同窓会の協力を得て集めた、現在北米地区に在住されている卒業生等のデータ約400件強を基に、メール等により直接案内及び北米日刊紙等への掲載によりお知らせし、当日は、西海岸地域以外の、遠くはワシントンDCやニュージャージー州等東部からの出席者も含め、総勢59名の参加がありました。

交流会では、室岡義勝サンフランシスコセンター長から、海外教育研究拠点についての大阪大学の取組状況や、サンフランシスコセンターの役割について説明があった後、宮原総長から法人化後の大阪大学について、自ら作成された資料をもとに、国立大学法人の目的、本学における教育目標、研究理念、国際交流活動及び同窓会組織の必要性等について、具体的な事例を取り上げながら説明がありました。

設立総会では、開催に先立ち、鈴木理事・

副学長（大阪大学同窓会連合会代表幹事）から、大阪大学同窓会連合会の設立経緯、趣旨等並びに、学部・研究科を横断する人的ネットワークの構築の必要性等について説明がありました。総会では、役員等の選任、会則の承認に続き、今後の事業計画等について意見交換が行われ、会員相互の交流、親睦をより一層深めていくため、毎年開催することが確認されました。

引き続き、記念講演会が開催され、本学大学院法学研究科客員教授で、現在Bank of the West 取締役顧問の松浦 功氏から「歴史は繰り返すか？」と題し講演いただきました。

レセプションでは、橋本理事による乾杯の発声の後、参加会員相互の名刺交換から始まり、宮原総長をはじめ、大阪大学執行部を囲んで和やかに歓談が行われ、中には、同窓生として大阪大学への支援の具体的方法などについても尋ねられる一幕もあり、米国に永住されているご高齢の卒業生の中には、感激のあまり涙ぐまれる方もおられました。

参加された方々からは、直接総長や理事等と話ができる機会に恵まれ、また、大阪大学の近況を聞いたことが、非常に有意義であったとの意見が多く寄せられ、コミュニケーションの必要性を再認識することとなりました。予定されていた時間は、あっという間に過ぎ、北米地区同窓会の発展と、次回東海岸での再会を誓い合い盛会のうちに散会となりました。



参加者全員による記念写真



大学院生、社会人の学際領域キャリアアップをめざして 部局連携副専攻型「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」

ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構長 馬 越 佑 吉
同 副機構長・ナノ企画推進室長 伊 藤 正

ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構の設立

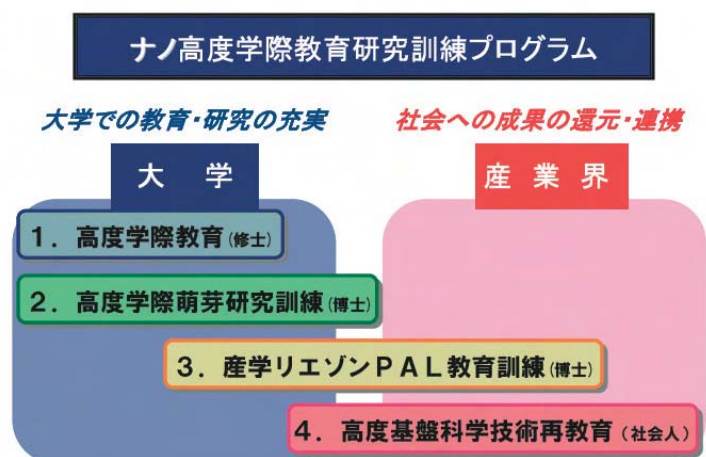
ナノサイエンス・ナノテクノロジーは、10億分の1メートルを単位とする微小世界（原子数が数十個から数万個）で実現する様々な科学現象の発見と、それらを活用したナノスケール材料とその機能の創成、超微細加工、超精密計測といった最先端技術の発展を導いており、自然科学技術の根幹をなす要素科学技術として、様々な基盤研究分野と学際・萌芽的な研究分野との連携を促進させ、未来の新しい学問領域・産業領域を創出する原動力となるものと期待されています。2002年4月に設立された本学初の部局横断研究推進組織である大阪大学ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構は、研究推進室の下で、学内外の研究ネットワークとインターフェイスの構築を目指して、この学際性の極めて強い先端分野の研究推進、国際・産学連携、人材育成について、部局を横断して組織的かつ戦略的にこれらを統括しつつ、全学的な教育研究の企画と推進に努めています。

（詳細については、<http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp/nano/framepage2.html> を参照）

大学院レベルのナノ人材育成のコンセプト

今日のナノサイエンス・ナノテクノロジー関連領域のめざましい発展の多くが、既存学問領域を越えた分野間の「融合と協奏」による新しい領域の形成という大きな流れの中で生み出されています。しかし、ナノ領域における学問の目標や研究に必要な既存学問領域の知識は高度で幅広く、しかも次々と変化していきますので、基盤教育を含めて限られた固定カリキュラムで大学院のナノ領域に関する専門教育を行うことは長期的には不十分です。その持続的な発展のためには、多部局の連携協力による若手人材育成の大学院プログラムの実施が強く望まれます。もちろん、これまでも大学院生は他専攻、他研究科の講義科目を聞くことは可能でしたが、現実には限られた人数の履修に留まっていました。その意味でも体系化されたナノプログラムを学際横断的に全学に向けて積極的に提供する意義があるわけです。さらに、実践を考えれば、講義だけでなく、最先端機器を用いてナノ物質の設計、作製、構造観察、機能測定を行える大学院レベルの実習教育・研究訓練も是非必要です。

一方、ナノサイエンス・ナノテクノロジーはこれからの産業界の技術開発の要となるものですから、この分野で指導的役割を担う人材を産学が協働して育成することが望まれます。その1つは博士課程での産学連携の教育訓練と企業での研究インターンシップとをカップルさせた産学リエゾンプログラムです。もう1つは、企業の若手、中堅研究者・技術者を対象とする社会人再教育プログラムです。これらにより、大学側は大学院生の企業センスを育み、より実社会にマッチして技術革新の将来を担える人材の育成を行えますし、企業側はこのプログラムを受けた意欲ある博士修了者の学際領域キャリアを評価した雇用や、人材育成を通じた大学の教員との新しい連携というシナジー効果が生まれます。



ナノ高度学際教育研究訓練プログラムの4つの柱

部局連携ナノプログラムの開始

そこで、ナノ研究推進機構では、『既存の専門基盤領域（縦系）と萌芽的学際横断領域（横系）を織り込んだ教育研究プログラムで、常に変化していく先端科学技術を果敢にかつ柔軟に担える、学際的関心と幅広い能力を持った大学院レベルの人材を育成する』ことが必要との認識に立って、学際研究領域キャリアアップのための副専攻型「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」（以下、ナノプログラムと呼びます）を、全学の関連部局である理学・医学系・薬学・工学・基礎工学・生命機能の6研究科、産業科学・接合科学の2研究所、超高圧電子顕微鏡・極限科学・太陽エネルギー化学の3研究センターの連携協力の下に、2004年4月に博士前期課程（修士）プログラムを開始し、間もなく文部科学省（科学技術振興調整費新興分野人材養成（2004－2006年度採択））の支援を得たことで、同年10月より社会人再教育プログラム、博士後期課程の学際萌芽研究訓練、2005年度より産学リエゾンPAL教育訓練を順次開始しました。これらは大学と産業界にまたがる若手人材の学際領域キャリアアップを目指した国内初のユニークな副専攻型人材育成プログラムです。以下にこれらの概要をご紹介します。

博士前期課程プログラム

理学、医学系、薬学、工学、基礎工学、生命機能の6つの大学院研究科で実施されているナノ分野に関連する博士前期課程（修士）科目約90科目を取り上げ、新規開講の集中実習を付加して、高度学際教育プログラムとして下表のような5つのプログラムに体系化しました。大学院生は自分の専攻とは別にナノプログラムの1つを選択し、実習を含む所定の単位を修得すると卒業時に履修認定証が、就職活動時には履修証明書が交付されます。

プログラム名	講義科目数（4科目以上選択）	実習科目（必修）	教員所属部局
ナノマテリアル・ナノデバイスデザイン学	7科目	1科目 3テーマ	理、工、基礎工、産研
ナノエレクトロニクス・ナノプロセス学 （2コース）	20科目	1科目 7テーマ	理、工、基礎工、産研、極限セ
超分子ナノバイオプロセス学 （2コース）	28科目	1科目 9テーマ	理、医、薬、工、基礎工、産研、蛋白研、太陽セ
ナノ構造・機能計測解析学	14科目	1科目 9テーマ	理、工、基礎工、生命機能、産研、電顕セ
ナノフォトニクス学	24科目	1科目 4テーマ	工、基礎工、生命機能、産研、レーザーセ

博士前期課程高度学際教育プログラム（2005年度）

このプログラムの狙いは、各部局の教員が持つナノ人材育成に対する力を結集し、大学院生に部局を跨って講義を聞く機会を積極的に提供し、主専攻では経験できないナノ分野の基本知識・技術を修得してもらうことにあります。毎年100名以上の理系関連部局の大学院生が自専攻を越えた教育プログラムに参加しており、夏季集中実習プログラム（3－5日間）では、吹田、豊中両キャンパスの関連研究室多数の協力により、80名を超える学生が所属研究室とは異なる専攻・部局の研究室や新設のナノラボラトリー、または集中合宿の形で実習を体験しています。このように、専攻を越えて、あるいは研究科を越えて学際科目を履修しようとする大学院生の新しい動きは確実に始まっています。この動きをより実りあるキャリアアップに結びつけるために、各人の目的にあったプログラムや科目の設定・選択をよりきめ細かく指導していきます。また、一部の科目ではこのプログラムを意識した内容の改定や新規設定が行われています。



実習風景 超分子ナノバイオプロセス学



実習風景 ナノ構造・機能計測解析学



実習風景 ナノエレクトロニクス・ナノプロセス学

博士後期課程プログラム

高度学際萌芽研究訓練と産学リエゾン PAL 教育訓練の2つのプログラムからなり、春に説明会を開催した後に履修者の募集を行い、週1回程度の割合で1年間実施されます。高度学際萌芽研究訓練は、学内から提案された学際萌芽的な課題に対して異分野からの大学院生を募って、企画討論、自主的研究、報告活動を実施させて、ナノ領域の学際萌芽研究の企画・実施能力を育成するプログラムで、異分野出身の学生同士が科学用語や思考のバックグラウンドの違いを克服して、共通の認識を持って研究訓練を体験することにより、学際領域のプロジェクトリーダーになれる素養を身につけることが狙いです。今年度は、「計算機ナノマテリアル・デザイン」、「透過電子顕微鏡によるナノ材料・先端機能性材料のナノ構造解析」、「誘電体分極反転ナノ構造物質の電子・光物性」の3つのテーマが設定されています。

一方、産学リエゾン PAL 教育訓練は、大学・企業双方から指名されたコーディネータ（企業側からは特任教員として参画）が課題を設定し、複数分野から数名の大学院生を募ってプロジェクト指向学習型（PAL:Project Aimed Learning）で企画・討論・報告・研究インターンシップを含む教育研究訓練活動を行うものです。このプログラムは、産学が連携して企業における開発研究活動の見識を持った博士人材の育成を図るもので、開発研究の長期実践活動を体験できるユニークな取り組みです。その課題は共同研究に比べて、もっと基本的、萌芽的なものが取り上げられており、現在は松下電器産業㈱の「ナノフォームの物性機能探索」、㈱東芝の「MEMS 技術を用いた医用センサ・バイオアクチュエータへの応用」が実施されています。

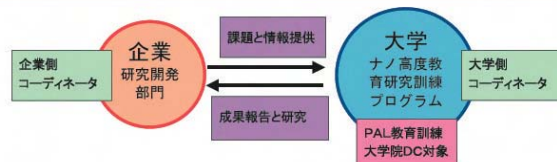
博士後期課程学生にとっては、主専攻に重ねて副プログラムを履修することは時間的にも決して容易ではありませんが、今年度はプログラム全体で11名の後期課程大学院生が参加し、必要に応じて研究費の配分も受けて積極的に活動を展開しています。プログラムの今後の発展のためには、後期課程大学院生を指導する各教員の本プログラムに対するより一層の理解と、大学院生の学際領域キャリアアップへの積極的支援が望まれます。



ナノラボラトリー 透過電子顕微鏡

産学リエゾンPAL（プロジェクト指向学習型）教育訓練

- 1) 産学リエゾンPALコーディネータと企業側派遣のコーディネータ(特任教員)との協議によりプロジェクト指向型の課題を設定
- 2) 学生は企業との共同研究プロジェクトを体験、企業活動の見識を持つと同時に、実践活動として企業で研究インターンシップを体験
→ よりスキルの高い博士人材の養成と博士取得者の就職環境の向上



博士後期課程プログラムガイダンス風景

社会人再教育プログラム

ナノ分野の研究開発に従事、または将来従事する可能性のある企業の研究者・技術者を対象に、前期課程と同じ5つのコースを設定し、各コース毎週1回、年間30回の夜間講義（8単位）（毎週月～金曜日の午後6時から9時まで）に集中実習を加味した社会人向けの大学院レベル高度基盤科学技術再教育プログラムです。プロジェクトリーダーとして新産業創成を担う高度研究者・産業人の育成が狙いです。受講生は大学院科目等履修生として大阪大学に入学しますが、科学技術振興調整費の支援期間中の授業料は無料に設定されています。教員は再教育主任の赤井久純教授（理）を中心に学内が約2/3を占めますが、より幅広い視点からの教育のために、産業界からの企業併任特任教員、他大学からの非常勤講師にも多数加わっていただいています。大阪大学中之島センターにて講義を行うとともに、中之島センターのご支援による遠隔

講義システムを通じて、東京地区（JR 田町駅前キャンパス・イノベーションセンター内大阪大学東京オフィス）、京阪奈地区、仙台地区、吹田、豊中両キャンパスの5ヶ所に2画面（講師・教室映像と講義資料）がライブ中継され、質問や討論を含めて同時双方向受講ができます。講義8単位と実習を履修した受講生にはナノプログラム履修認定証と阪大エクステンション修了証が授与されます。1期生、2期生をあわせて130名を超える社会人が科目等履修生として参加しています。

なお、前期課程・社会人再教育のナノ実習、および博士課程の教育研究訓練のための共通設備として、2003年度総長裁量経費、2004年度以降の科学技術振興調整費により電子顕微鏡、プローブ顕微鏡、レーザー顕微鏡、クラスター計算機、電子線リソグラフ装置などがナノラボラトリー実習装置として順次整備され、学内関連研究室の多くの装置とあわせて、ナノ構造を設計する、作る、観る、機能を測る、の4つの基本技術の実習が行えます。また、ナノラボラトリー装置の一部は実習修了者を中心に共同利用に供されています。



社会人再教育2期生開講式



社会人再教育講義風景



社会人再教育 ディベート風景

本プログラムの詳細は、<http://www.sigma.es.osaka-u.ac.jp/pub/nano/>に掲載されています。2005年度の実施体制は、各プログラムの企画・運営を担当する学内主任教員と教育研究コーディネーターを中心とする専任特任教員、講義・実習担当の学内教員、企業併任特任教員と他大学非常勤講師からなる教員組織以外に、中之島センターおよび東京オフィスを運営する国際公共政策研究科の教職員、研究協力・学務を始めとする関係事務職員等も含めて、学内外の延べ200名を超える教職員の方々のご尽力により、このプログラムは成り立っています。ここに改めて感謝いたします。

まもなく2006年度のナノプログラムが開始されますので、多くの大学院生の皆さんの積極的な参加を歓迎します。また、新規開設が予定されているプログラムも含めて、これら部局連携学際横断プログラムが、大学院生や社会人の学際領域キャリアアップ副専攻プログラムとして組織化されて、しっかり根付きますよう、皆様のご意見やご要望がありましたら、ぜひお聞かせくださいようお願いいたします。

うまこし・ゆうきち

プロフィール

専門：材料強度学・生体組織工学・材料組織学。大阪大学工学部助手・助教授・教授。2002年工学研究科長・工学部長に就任。2004年より国立大学法人大阪大学理事に就任。同年よりナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構長、日本学術会議会員。

いとう・ただし

プロフィール

専門：物性物理・基礎、光物性実験、レーザー分光。東北大学理学部助手・助教授・教授を経て、1998年より大阪大学大学院基礎工学研究科教授。2004年より大阪大学研究推進室員。同年よりナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構副機構長。

役員室だより

2006.2 Vol.10

1月24日から26日まで、平成19年度概算要求等にかかる各部局のヒアリングを実施しました。これまでより各部局あたり10分間ずつ時間を長くし、単に概算要求事項の説明をして頂くだけでなく、各部局における具体的な取り組みについて、年度計画の進捗状況等も合わせ意見交換をさせていただきました。国の政策においても、我々国立大学法人を取り巻く環境は、決して楽観できるものではありません。12月号でも申し上げましたとおり、総長のリーダーシップの下、構成員の意見を反映させた変革・改革を強力に推進し、実りある2006年とするために執行部も不斷の努力を惜しみません。各部局から要望のありました事項についても、本学が掲げる中期目標を基本に慎重に検討し、教育研究環境の整備に力を注いでいきたいと考えています。

各室の検討状況

総合計画室

施設マネジメント委員会

現在、平成17年度に策定されたキャンパスマスタープランのリーディングプロジェクトをキャンパスデザイン室と施設部にて計画、推進しています。豊中キャンパスでは、待兼山周辺修景工事を実施しており、ご不便をおかけしていますが、4月に新入生が希望に胸躍らせてこの坂を上る姿を見るために、急ピッチで工事を進めています。また、吹田キャンパスでも、本部共通棟横プロムナード整備計画（Ⅰ～Ⅳ期）のⅠ期工事を実施しています。メインストリート（東西通り）と正門通りをつなぐ、来訪者にわかりやすい開放感のある歩行者空間を形成します。千里門周辺も水遠池を望む、地域に開かれた広場化された空間の形成、整備を進めています。今後も学生達が、「学びたいキャンパス」、「語りたいキャンパス」と感じてもらえるキャンパスとなることを目指し、環境整備に努めていきたいと考えています。

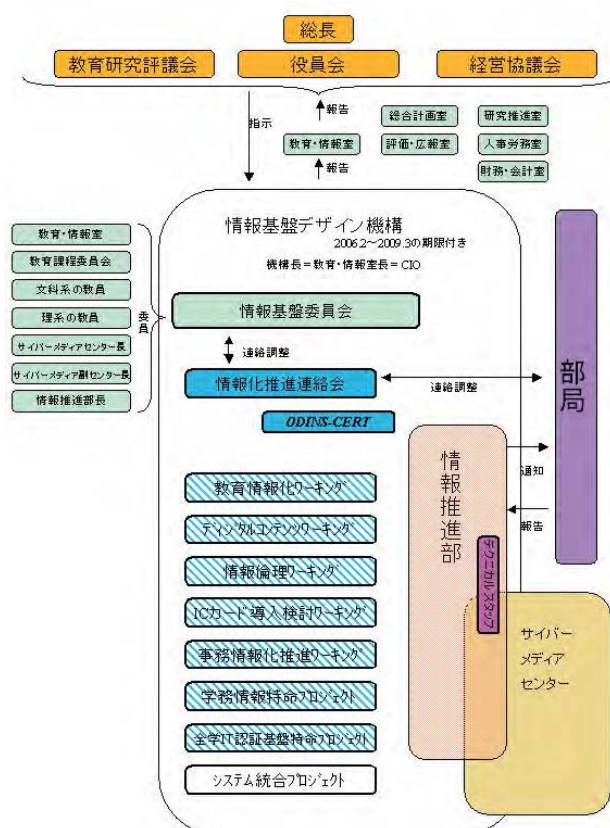


本部共通棟横プロムナード整備計画（Ⅰ期～Ⅳ期）完成予想図

教育・情報室

大阪大学情報基盤デザイン機構の設置

大阪大学の「情報基盤」の在り方については、国立大学法人化を機会に整備された、「教育・情報室」の下に「情報ネットワークシステム委員会」、「マルチメディア教育委員会」及び「デジタルコンテンツ委員会」を設置して、これらの委員会の下で各種審議を行ってきました。「情報ネットワークシステム委員会」は、委員構成が部局代表者ということもあり、ともすれば部局意見の調整的な審議になる傾向があり、大阪大学の長期的ビジョンの立案及び策定については、現状の「情報ネットワークシステム委員会」では機動的な審議が難しいという声もありました。さらに大学全体の情報基盤である大阪大学総合情報通信システム（Osaka Daigaku Information Network System）の維持管理、将来ビジョンなど大学として方針を検討する必要がありました。



教育・情報室の下に検討ワーキングを設置し合計8回にわたる審議の結果、大阪大学に情報基盤の整備充実を図ることを目的とした「情報基盤デザイン機構」を設置することにし、教育研究評議会です承されました。

本機構は、平成18年2月1日にその活動を開始しましたが、これにともない、「情報ネットワークシステム委員会」、「マルチメディア教育委員会」および「デジタルコンテンツ委員会」を統合し「情報基盤委員会」を設置するとともに、情報基盤デザイン機構を支える事務部門として「情報推進部」を設置し、責任の明確化と機動的体制の構築を図っていきます。

教養書企画WGの設置

大阪大学と大阪大学出版会が連携して、共通教育を中心とする教科書や一般読者を対象とする教養書を計画的に刊行するため、教育・情報室内に教養書企画WG（委員長：天野文雄文学研究科教授）が設置されました。大阪大学出版会では、現在、大学内や社会のニーズを反映した出版をめざす改革を積極的に進めており、本WGで体系的な良書が企画・選定されることが期待されています。

平成18年度特色GP、現代GPのヒアリングを実施

平成18年度特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）および現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の申請にあたり、教育・情報室員による学内ヒアリングを2月1日に実施しました。

研究推進室

財団法人武田科学振興財団 2006 年度一般研究奨励の学内選考

本研究奨励に対して学内関係部局から推薦のあった 16 名の中から、研究推進室で編成したワーキングメンバーにより、当該財団からの推薦枠 5 名に対する学内選考を行いました。

本学の推薦内訳は次のとおりです。

医学系研究科（2 件）、薬学研究科（1 件）、生命機能研究科（1 件）、蛋白質研究所（1 件）

研究懇話会

今年度で 11 回目となる研究懇話会を、3 月 7 日(火)に医学部銀杏会館で開催します。これは、関西の企業等に対して大阪大学における研究活動等の情報を提供するとともに、本会を通して企業等から研究者等人材の養成、共同研究の実施など本学に対する要望等を受け、本学の教育研究に反映することを目的としています。

今回のテーマは、「特別教育研究経費による研究プロジェクトと産学連携」とし、本学の微生物病研究所、産業科学研究所、蛋白質研究所及び接合科学研究所において実施している各事業と産学連携を絡めた内容の講演を行っていただきます。

共同研究ユニット（共同研究講座、共同研究部門）制度

この制度は、本学の研究シーズを活かし、社会の要請に応える新規学問分野の創成現場、独立した研究ユニットで効率的な研究と技術・情報管理、大学院生の OJT や後期課程の学生の活躍の場として、さまざまな状況に柔軟に対応できる自由な形態の講座を民間等と協働で構築するための制度です。そこでは資金を出資する民間企業から研究者及び研究経費などを受け入れることとしています。現在、本制度を具現化するため、各部局や関係事務と調整を行っており、平成 18 年度から導入する予定としています。これにより、社会の発展に資する学問領域の研究拠点を産業界などと共同して大学内に長期的に確保し、協働することにより研究と社会に貢献します。

平成 18 年度研究支援推進経費・非常勤研究員経費

附属研究所、センターの研究活性化のための研究支援推進経費（外部からの支援協力者を確保し、研究プロジェクト等の効果的な推進を図るための経費）・非常勤研究員経費（若手研究者を非常勤研究員として研究プロジェクト等に参画させ、研究者としての資質向上等、若手研究者の養成・確保を図るための経費）の各経費について、平成 18 年度の配分を決定しました。

部局横断型の研究プロジェクト支援経費によるシンポジウム

研究推進室が重点経費として配分を受けた部局横断型の研究プロジェクト支援経費によるシンポジウム等の開催状況（予定も含む。）は次のとおりです。平成 18 年度も引き続き支援できるよう予算要求を行っています。

開催日	シンポジウム等名称	主たる世話人
2005/12/2	第1回「アクア」サブWGセミナー	基礎工学研究科 教授 大垣 一成
2005/12/14	21世紀を拓くフロンティア産業パイオ	工学研究科 教授 原島 俊
2005/12/17	「知と行動シンポジウム」 初期視覚系ニューロン活動の時空間ダイナミクス	生命機能研究科 教授 藤田 一郎
2006/1/7	ワークショップ「東アジアの地域統合と中国」	文学研究科 教授 秋田 茂
2006/1/27	先端技術デザインセンターワーキンググループ 第1回シンポジウム	工学研究科 教授 谷口 研二
2006/1/30-2/1	Handai Nanoscience and Nanotechnology International Symposium ～ Fusion of IT / M&BT / NT / Design ～	工学研究科 教授 森田 清三
2006/2/27	人間の安全保障ー第1回ワークショップ	人間科学研究科 教授 栗本 英世
2006/3/2, 3/9	非線形テクノサイエンス研究会	基礎工学研究科 教授 杉本 信正
2006/3/4	超高圧電子顕微鏡連携ステーションワーク ショップ	超高圧電子顕微鏡センター 教授 森 博太郎
2006/3/11	文理融合研究の展望	人間科学研究科 教授 小泉 潤二

評価・広報室

全学基礎評価

平成17年度全学基礎評価の試行を終え、各部局に基礎評価書を送付しましたので、今後の教育研究の取り組み・見直しにご活用ください。今回の全学試行において、全体の作業量の算定、必要な人員の数と配置についての見積もり、基礎評価シートの妥当性、全学基礎データの使いやすさの検討、評定の仕方の基準作り、問題点の洗い出し、等々を検証課題としました。試行で得られたこれらの成果を基に、次年度は、基礎評価のシステムが円滑に作動するかどうかを見極め、データを部局がより使い易いように改善したり、センターの評価シートをミッションに合ったものに改定するなど、評価手法等について改善していく予定です。

阪大NOW表紙のリニューアル

平成18年1月号（No.87）から、表紙デザインを一新しました。今回のリニューアルでは、学外への広報を意識して、より強いインプレッションを与えるようなデザインを採用しています。



大阪モノレール駅への情報コーナーの設置

地域社会と連携を強化するため、大阪モノレールの千里中央駅及び阪大病院前駅にパンフレットスタンドを1月16日から設置しました。

地域の方々により大阪大学を身近に知ってもらうための広報活動の一環で、大学の教育研究内容やシンポジウム等の情報を提供していきます。

財務・会計室

平成17年度重点経費、間接経費執行計画

平成17年度の「重点経費」及び「間接経費」について、第2次執行計画案を策定し、12月26日の役員会で了承されています。追加採択事業の詳細については、以下のとおりです。

重点経費 5事業 (単位:千円)		
部局名等	事項名	金額
事務局(学生部)	刀根山寮ABC棟他屋上防水工事	14,568
事務局(研究推進・国際部)	国際交流会館B棟(留学生棟)等什器類更新経費	14,542
事務局(学生部)	刀根山寮他ガス湯沸器更新等経費	7,300
基礎工学、経済学、理学、情報科学研究科	「金融・保険教育研究センター(仮称)」設立準備経費	7,000
事務局(学生部)	新稲寮屋上他防水工事	4,914
計		48,324

間接経費 15事業 (単位:千円)		
部局名等	事項名	金額
事務局(施設部)	待兼山修学館サッシ等改修工事	35,000
共通(高圧ガス関係)	卓上酸素ガス発生機購入費	33,500
事務局(施設部)	(石橋・吹田)排水管清掃調査	23,500
附属図書館	書庫棟外壁改修工事	21,577
事務局(施設部)	全学微量PCB調査分析経費	16,940
微生物病研究所	電気室自家発電盤取替工事	16,000
事務局(研究推進・国際部)	国際交流会館A棟(研究者棟)居室壁クロス張替工事	11,000
言語文化研究科	研究棟屋上防水改修その他工事	10,000
蛋白質研究所	本館消火管改修工事	8,085
共通(高圧ガス関係)	屋外貯蔵所設置工事	8,000
医学系研究科	バイオ研究棟北側渡り廊下鉄部塗装等改修工事	7,960
事務局(研究推進・国際部)	国際交流会館A棟(研究者棟)等什器類更新経費	7,200
事務局(施設部)	学内施設吹付石綿等分析調査経費	3,000
事務局(安全衛生管理課)	安全衛生管理ガイドラインの作成経費	3,000
事務局(研究推進・国際部)	海外拠点設置に関する調査経費	1,000
計		205,762

承継剰余金

法人化以前に発生した事件に係る損害賠償費用等について、ある一定額が承継剰余金として交付されています。この承継剰余金については、概算要求による過不足調整という仕組みがあり、今年度には不足額が生じる見込で、大学全体の予算で立て替えることとしております。

なお、承継剰余金過不足調整に係る取り扱いの状況変化等を見極めた上で、承継剰余金不足財源の負担先等を改めて検討することとしております。

平成18年度の予算配分

平成18年度政府予算案が、昨年12月24日に閣議決定され、本学の平成18年度予算の全容が、ほぼ判明しました。

このため、財務・会計室において、他大学の予算配分方式等を参考にしながら、法人を取り巻く状況の推移、あるいは、各室における理念や評価等の検討の進捗状況を踏まえ、本学にとって包括的且つ理想的な予算配分方式の策定や評価に基づく傾斜配分の検討を進めています。

人事労務室

一般職員採用試験制度(本学非常勤職員等対象)

大阪大学に在職している非常勤職員を対象にした常勤職員への採用試験制度を新たに設け、今回、事務系の業務を行っている非常勤職員を対象に、2月18日に採用試験(第1次試験)を実施しました。

合格者は、欠員状況等を判断の上、平成18年4月1日以降の採用予定となります。

国際交流推進本部

大阪大学の国際戦略

国際交流推進本部で検討を続けてきました「大阪大学の国際戦略」が、このほどまとまりました。大阪大学は、これまでの研究・教育・国際貢献の実績の上に立って「世界に開かれた魅力ある大学」の実現を目指します。私たちは、大学における研究・教育の成果は人類全体によって享受されるべきものであり、そのためには何よりも「世界に開かれた魅力ある大学」でなければならないと考えます。また「世界に開かれた魅力ある大学」であってこそ、世界の各地から人が集まり、研究・教育の一層の発展と国際社会へのさらなる貢献が可能になるものと考えます。

そのために、次のような目標を掲げます。

- ◆海外研究者・研究機関との連携促進と、研究成果の世界への発信
- ◆国際社会でコミュニケーションし、創造的・建設的に行動できる人材の育成
- ◆アジアにおける共同研究コミュニティ構築による国際貢献

これに続いて項目ごとの具体的行動計画を書いています。

同時に「Osaka University's Global Commitment and Strategies」の題名で、英語版も用意しました。「大阪大学の国際戦略」は日・英版それぞれを冊子として発行していますし、大阪大学のホームページにも掲載しています。国内の大学はもとより、大阪大学の海外教育研究拠点や交流協定大学を通じて、「大阪大学の国際戦略」を世界に伝えていきたいと考えます。

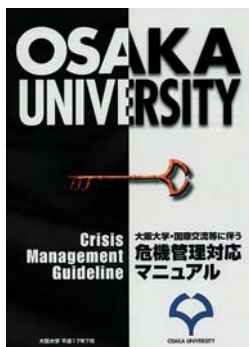


大学国際戦略本部強化事業

大阪大学が、文部科学省から公募のあった「大学国際戦略本部強化事業」に、他の19の大学・機関とともに採択されたことは既にお知らせしたところです。その一環として、国際交流推進本部のもとに国際企画室を設置し、国内外の大学の国際戦略や学内の国際化の取り組みに関する現状調査を行うなど、推進本部の今後の戦略策定に資するような調査・企画活動を開始しています。さらに、この1月30日、同事業の実施機関である（独）日本学術振興会ほかの主催で、「大学の国際戦略一戦略的・組織的な取り組みを目指して」と題する公開シンポジウムが開かれました。このシンポジウムは3つのセッションから成り、セッション1は「大学の国際戦略一組織づくり・目標設定」、セッション2は「研究の国際展開一外部資金獲得・海外拠点」、セッション3は「内なる国際化一キャンパスの国際化・職員養成」でした。大阪大学はセッション3を割り当てられ、辻 毅一郎総長補佐が出席し、留学生・研究者の来日時におけるワンストップ・サービスや、大阪大学の国際コミュニティのネットワークである GCN-Osaka ならびに GCN-Worldwide などについて発表しました。GCN は意欲的な取り組みであると高く評価され、多くの大学から強い関心が寄せられました。また、ワンストップ・サービスは、これまで各部局や受け入れ教員が担ってきた入国関係の手続きや宿舍紹介を一本化し効率的に行うことによって、受け入れ部局・教員の負担を軽減しようとするもので、今年度より検討をはじめたものです。これにも関心をもたれました。

このシンポジウムには、220名の参加者があり白熱した討論が行われました。このように、大学の国際戦略をめぐる大学間の競争が激化しています。

大阪大学・国際交流等に伴う危機管理対応マニュアル



大阪大学は、1,000名を超える留学生のほかに、年間約2,000名の研究者を海外から受け入れています。同時に多くの本学学生や教職員を海外に派遣しています。

現在の情勢下、国内外においてどのような危機が発生するかも分かりません。大学としては危機予防や安全配慮義務を全うするとともに、万一、危機発生時に適切な対応をすることが求められています。こうしたことに対処すべく、国際交流推進本部では「危機管理対応マニュアル」(Crisis Management Guideline)を検討してきましたが、このほど冊子として完成いたしました。なお、受け入れ留学生・研究者が直接関係するところには英文が付記されています。受け入れ、派遣のガイダンス・オリエンテーションなどで、このマニュアルを活用されることを望みます。

タコから考える日常の安全

安全衛生管理部 助 手 太刀掛 俊 之
助教授 山 本 仁

このタコは安全か？

みなさんの周りで、ひとつのテーブルタップから、いくつもの電気製品のコードが延びている光景を見かけたことはありませんか？下の写真のような配線の仕方は、コードの発熱や発火の危険性が高まるため、海中に住むタコの姿に見立てて、“たこ足配線”と呼んでいます。教職員の間でも『“タコ”いうからには8本まで大丈夫』といった冗談を耳にするぐらいですから、正確な定義をご存知ない方も多いのではないのでしょうか。

実験室や居室の安全・快適についてみなさんに確認していただくよう安全衛生管理部で作ったチェックシートには、“たこ足配線”についての項目も含まれています。しかし、実際にチェックをしようすると、どのような“たこ足配線”

になるのか、といったことで判断に迷うと思います。いったい何本まで接続しても大丈夫なのでしょう？

テーブルタップであれば、定格容量（電気の容量）が定められており、タップ本体に1500Wなどと表示があります。つまり、使用する電気製品に表示されている消費電力の合計が、テーブルタップの定格容量を越えてしまうと、足の本数にかかわらず“たこ足配線”ということになります。ぜひ一度、みなさんの周りでも、確認してみませんか？接続部にホコリが溜まっていないかもチェックポイントになります。使用しない電気製品のコードは、こまめにタップなどから抜く習慣づけをしたいものです。



安全・快適は Know How と Know Why で

“たこ足配線”が危険であることは大半の人が知っています。ところが、必要に迫られると、多くの人が“たこ足配線”をしてしまいます。そこでこのような行動から、日常の安全に関心が向きにくい背景について考えてみます。

安全の基本は、『安全を確保するにはどうすればよいかを知っている』という **Know How**（ノウハウ）だけではなく、『安全についてどうして取り組むのか』といったことや、『安全でない状態があるならば、どうしてそのような状況になるのか』といった背景を考える **Know Why**（ノウホ

ワイ）の視点が重要といわれています。“たこ足配線”をしてしまう背景を考えると、次のような声が聞こえてきそうです。

『“たこ足配線”が危険なのは知っている』けれども、「コードを何本接続すると“たこ足配線”になるのかわからない」といった意見が多く挙がるでしょう。また、「今まで大丈夫なのでこれからも大丈夫」、「みんながしているので」、「決まりを守らなくてもペナルティがあるわけではないので」などの意見もありそうです。

一般的には、安全の取り組みに関心が向かなかつたり、うまくいかなかったりする場合には、次のような背景があるといわれています。“たこ足配線”の例では、①や②が当てはまりそうです。

- ①本人が、危険に気づいていないので、危険を回避するための方法や決まりを知らない
- ②本人が、危険を回避するための方法や決まりを理解していない
- ③本人が、危険を回避する方法や決まりに納得していない
- ④周りも、危険を回避する方法や決まりを守っていない
- ⑤危険を回避する方法や決まりを守らなくても、たいいていの場合、罰せられるわけでもない

事故を未然に防ぐためには、“たこ足配線”以外にも、Know Why の視点から、身の回りを眺めてみることをお勧めします。例えば、③が背景にあれば、解決策として、危険を回避するための方法や決まりを、それらを守る立場にあるメンバーで吟味し、決定するといった工夫が有効です。また、④や⑤が背景にあれば、各人の認識が必要になります。そのためにも、『安全についてどうして取り組むのか』、『安全ではない状態があるならば、どうしてそのような状況になるのか』といった問いを自ら発し、**日常の安全を、Know Whyを出発点として捉えなおしてみることが、より安全でより快適な環境づくりが実現できるものと考えます。**

安全・快適について疑問や要望がうかんだら

安全衛生管理部では、注意喚起や周知徹底といった言葉に終始することなく、みなさんの安全・快適を後押しできるように、学内のセンターや教職員の方などと協力して講演会や講習会の開催を行っています。また、チェックシートによる巡視や、事故連絡票を使った事故報告のお願いなどもしています。なお、ホームページでは、安全・快適に関する学内の動きを公開しているほか、すぐに印刷して利用できるポスターや棚の固定方法に関するマニュアルといった実用的なものも用意しています。必要に応じて、ぜひ活用してみてください。

本学の安全・快適レベルを向上させるための万能な処方箋を用意することはできませんが、安全衛生管理部では、行事の開催やホームページの充実などをとおして、みなさんの取り組みに応えています。『たこ足配線』は何本まで安全かのような素朴な疑問でも、実は多くの人が知らないものです。このような日常的なことがらから法的な対応などの専門的なことがらに至るまで、本学の安全・快適について疑問や要望がありましたら、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

(お問い合わせ先)

安全衛生管理部 06(6879)4023 吹田

06(6850)5992 豊中

E-mail: anzeneiseikanri@ns.jim.osaka-u.ac.jp

安全衛生管理部ホームページ

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/anzen/index.html>

安全衛生標識

○● 各実験室、研究室、事務室等で必要な安全標識(PDFファイル)をダウンロードの上、利用してください。○●

※ダウンロードしたい標識のアイコンをクリックしてください。
保存する場合は右クリックしてください。



ホームページから安全・快適の取り組みに活用できるオリジナルのポスターやマニュアルがダウンロードできます

たちかけ・としゆき

安全衛生管理部専任助手（人間科学研究科人間科学専攻助手）。吹田地区事業場専任衛生管理者。

プロフィール

やまもと・ひとし

安全衛生管理部専任助教授（理学研究科高分子科学専攻助教授）。豊中地区事業場専任衛生管理者。

プロフィール

理学研究科技術部学外研修（京都大学防災研究所技術室訪問）

理学研究科技術部では京都大学防災研究所の協力を得て学外研修を、8月30日(火)に同研究所において実施しました。

概要の説明を受けた後午前中に振動台、風洞実験、地震予知研究センター、工作室の各施設の見学と説明を受け、午後からは「関西における地震災害への備え」と題して岩田知孝京都大学防災研究所教授（強震動地震学分野）の講義と「安全管理の取り組み」の現状報告を両技術部（室）から行い、その後「技術職員の身近な問題とこれからについて」討論・意見交換を行いました。

今回の技術部（室）交流は双方の技術職員にとって大いに役立つ意義のある研修となり、今後の取り組みと成果が期待されるものでした。

（大学院理学研究科・理学部）



京都大学防災研究所での研修

日・ノルウェー国交樹立100周年記念・大阪大学シンポジウム 「テロ対策と人権保障」開催



右よりK. E. セーテル・ノルウェー王国法務省法制局課長、M. ルード・同法務省事務次官、K. ストールベルグ・法務大臣、川村暁雄・神戸女学院大学助教授、星野俊也・国際公共政策研究科教授の各氏。

11月8日(火)、大阪大学中之島センターで、大学院国際公共政策研究科、駐日ノルウェー王国大使館および大学院法学研究科・大学院高等司法研究科との共催により、日・ノルウェー国交樹立100周年記念・大阪大学シンポジウム「テロ対策と人権保障」が開催されました。

シンポジウムには、行政機関職員、研究者、学生らが参加し、ノルウェー王国法務大臣クヌート・ストールベルグ氏による基調講演「テロ対策と人権保障～ノルウェーのアプローチ」の後、「テロ対策と人権保障」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

（大学院国際公共政策研究科）

理学研究科技術職員研修(第14回)実施

11月11日(金)理学研究科会議室において「第14回理学研究科技術職員研修」が行われました。

この研修は、理学研究科技術部に在籍する技術職員が独自に研修を企画し、実施することにより、技術部運営の経



験と実績の蓄積、自己並びに相互啓発の機会を与え、高度な専門技術の知識、技量等を修得することを目的として毎年実施しているものです。

開会式では「技術上の優れた業績を表彰し、もって広く教育・研究の発展に資することを目的とする」趣旨で、平成15年4月に制定された理学研究科技術賞に応募者の中から選考で選ばれた技術職員が表彰されました。

午前中は、小谷眞一大学院理学研究科長(数学専攻)による講話と専門講義「ブラウン運動をめぐる」、田島節子教授(物理学専攻)の講義と実験「高温超伝導：物理の挑戦と産業の創設」が行われました。

午後からは、技術賞受賞講演「ポータブル多重周回飛行時間型質量分析計の製作」と技術職員による「技術発表」「出張・研修報告」が行われ、活発な質疑応答はその後の懇親会にも受け継がれ益々意気込みの感じられる本年度の研修でありました。

(大学院理学研究科・理学部)

(財)武田科学振興財団より臨床医学研究に、5,500万円の研究助成 「武田記念臨床研究助成2005」

本学は、財団法人武田科学振興財団から5,500万円の研究助成金の贈呈を受けました。

この研究助成「武田記念臨床研究助成2005」は、財団の創設者六代武田長兵衛氏の生誕100年、多額出捐者武田彰郎氏の逝去25年の遺徳を顕彰する特別事業として、財団の生誕地等に近い7大学を対象としたものです。

助成の対象は、臨床医学の発展に寄与し、本学で最も必要とされる研究(全国的な波及効果のある臨床研究や学内共同研究プロジェクト等)であり、本学からは、以下の研究課題に助成されました。

- 荻原 俊男教授「生活習慣病のテーラーメイド医療実現のための新規危険因子の探索」
- 佐古田 三郎教授「セマンティック・ウェブ技術による疾患臨床データベースの高度化」

贈呈式は、11月11日(金)総長室において、行われました。

和やかな雰囲気のもと、宮原秀夫総長、横山 巖理事長及び研究代表者荻原俊男教授、佐古田三郎教授の挨拶で始まり、宮原総長から「貴財団の生命科学に対する期待を受け止め、研究に邁進していきたい。」との挨拶がありました。

挨拶に続いて研究代表者の立ち会いのなか、横山理事長から宮原総長へ助成金の贈呈が、各研究代表者からは、各々研究内容の紹介と謝辞が述べられました。

(研究推進・国際部研究推進課)



横山理事長から宮原総長へ助成金が贈呈



左から水本信之の常任理事(武田)、横山理事長(武田)、宮原総長、荻原教授、佐古田教授

大学院言語文化研究科再編拡充記念式典・記念講演会举行

平成 17 年 4 月、大学院言語文化研究科は、言語文化部を統合、再編拡充を達成いたしました。これを記念し、式典・講演会、祝賀会を 11 月 17 日(木)、千里阪急ホテルで学内外の関係者約 130 名の出席を得て挙行了しました。



式辞を述べる木村言語文化研究科長

大学院言語文化研究科は、昭和 49 年に外国語及び言語文化に関する教育研究を行うための組織として全国に先駆けて設置された言語文化部をその基礎として、言語文化・コミュニケーション・言語情報に関する学際的な学問分野の開拓を目指し、この種のものとしては全国で初の独立研究科として、平成元年に設置されました。

式典では、木村健治大学院言語文化研究科長の式辞、宮原秀夫総長の挨拶、筑和正格北海道大学大学院国際広報メディア研究科長の祝辞があり、次いで柳父 章桃山学院大学元教授による『言葉と文化』と題する記念講演が行われました。

祝賀会では、木村研究科長の挨拶、藤本和貴名誉教授の祝辞のあと、奥田博之名誉教授・初代言語文化研究科長の発声で乾杯をし、和やかに祝宴が繰り広げられ、盛会裡に再編拡充が祝われました。

(大学院言語文化研究科)

京都府立嵯峨野高等学校の生徒を対象とした特別授業を実施

大学院言語文化研究科では、10 月 22 日(土)、29 日(土)及び 11 月 19 日(土)に京都府立嵯峨野高等学校京都こすもす科国際文化系統 1、2 年生の生徒約 60 名を対象に特別講義を実施しました。これは高大連携の一環として実施したもので、今回で 3 回目となります。

同高等学校は、平成 14 年度から 3 年間、文部科学省から「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)」の指定を受け、英語教育を重視したカリキュラムの開発、実践的コミュニケーション能力の育成、広範な異文化理解の育成及び大学や海外姉妹校との効果的な連携について、研究・実践を行っています。

講義題目は、第 1 回「日本人はどのように外国語を学んできたか？」(中 直一教授)、第 2 回「言語とコンピュータの意外に親しい関係」(林 良彦教授)、第 3 回「大学の英語」(森 祐司助教授)で、分かり易く、興味深い内容となるように話が進められました。

毎回 2 時間の講義でしたが、生徒達は普段高校では受講することのできない大学院の講義とあって、メモをとりながら熱心に聴き入っていました。



また、生徒達から「多くの人の大変な苦勞の結果、今日の外国語教育があることを知った」、「コンピュータと言語の関わりがとても強まっていることを感じた」、「講義で習ったことを生かして、英語の勉強をしていきたい」などの感想が寄せられました。

(大学院言語文化研究科)

法学研究科・高等司法研究科産学連携プロジェクト平成17年度公開講義 「知的資産を活用した経営と法」を開催

法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科主催（後援：経済産業省）の産学連携プロジェクト平成17年度公開講義「知的資産を活用した経営と法」が、11月25日(金)に、大阪大学中之島センターにおいて開催されました。



同公開講義は、法学研究科附属法政実務連携センターが社会貢献の一環として毎年行っているもので、社会、とりわけ産業界において関心の高い法学に関わる問題をテーマとするものです。昨年度から、同センターと高等司法研究科が協力して行うことになりました。

今年度は、「知的資産を活用した経営と法」をテーマとしました。現在、企業の競争力の源泉として、知的財産を含む、知的な活動が介在して生まれる「知的資産」を活用した経営が注目されており、グローバルな競争が激化する中、企業は国際競争力を確保するために、そのような経営を通じて企業価値を高めることが求められているためです。

経済産業省・あずさ監査法人・富士通株式会社・塩野義製薬株式会社から専門家を招へいし、講演及びパネルディスカッションが行われました。社会人や学生など約60名が聴講し、受講者と講師との間で活発な議論が行われて、今年度の公開講義も盛況のうちに終了しました。

（大学院法学研究科・法学部、大学院高等司法研究科）

名誉教授会開催

本年度の名誉教授会が、11月21日(月)午後4時30分からリーガロイヤルホテル「桐の間」において、名誉教授111名及び名誉教授会から招待された部局長等42名が出席し開催されました。

会は世話人の岡田善雄名誉教授の挨拶で始まり、出席者全員で物故者の方々への黙祷が捧げられた後、2005年秋の叙勲を受けられた名誉教授の方々を紹介され、瑞宝重光章を受章された新開陽一名誉教授から叙勲者を代表して挨拶がありました。

また、今回から名誉教授会の世話人として新たに鈴木胖名誉教授（現兵庫県立大学副学長）が加わることとなり、紹介をした後、下條真司サイバーメディアセンター長から「インターネットの夜明けから未来へ」と題して講演が行われました。続いて宮原秀夫総長から、競争的資金等の獲得状況や今年度合格率全国1位となった司法試験の結果、職員福利棟に開設したカフェレストラン「匠」や石橋の阪大坂周辺の整備構想といったキャンパスの状況、昨夏発足した大阪大学同窓会連合会等、大阪大学の近況について報告がありました。

その後、懇親会では石谷清幹名誉教授による乾杯の発声



叙勲者を代表して挨拶する新開名誉教授

の後、お互いの近況報告など旧交を温めながらの歓談が和やかな雰囲気の中に続けられ、世話人の櫻井 洗名誉教授による、閉会の挨拶と、全員で万歳を三唱して盛会のうちに終了しました。

宮原総長からの大学の近況報告は、次ページに掲載。

（総務部総務課）

大学の近況

それでは、最近の大阪大学の状況についてお話をさせていただきます。

6月の名誉教授招待懇談会から半年間でいろいろ行ってきたこと、あるいはその活動について、少しご紹介させていただきます。

まずは、競争的資金をどのように獲得しているかということと、それから国立大学法人評価委員会の評価結果についてのご報告、また、最近の活動を説明させていただきます。

今、大阪大学がどういう組織で運営しているかということで、これは前にもご紹介したことになりますが、現在、総長及び7名の理事、そのうち5名が副学長です。それから2名の監事を設けております。法人化後、最も変わった点は経営協議会というのがあり、そこが外部の方の意見をいろいろ聴く機関として設置されており、現在は外部の方が13名、内部の人が13名の計26名で構成しております。

役員会の下に「室」を設けており、総合計画室は鈴木副学長、教育・情報室は馬場副学長、研究推進室は馬越副学長、評価・広報室は馬場副学長、財務・会計室は仁科副学長、それから人事・労務室は北見事務局長にお願いしています。更に国際交流推進本部は橋本理事にお願いしていると、こういう体制で現在進めております。

そこで、この体制のもと、競争的資金を取ってこることが強く求められるわけですが、最近のニュースとしてどういものが採択されたかを、ご紹介したいと思います。

◆平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

まず、このプログラムの趣旨は現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るために、大学院における意欲的かつ創造的な教育の取組み、俗に魅力ある大学院教育ということを重点において公募されたものです。

そこでは応募の範囲として、人社系、理工農系、医療系の三分野があり、大阪大学は人社系で4件出して3件採択と、それから理工農系では9件出して7件と、残念ながら医療系では獲得することが出来なかったのですが、新聞紙上でも、獲得数、金額ともに圧倒的に国立大学が多いと報道されていますが、大阪大学は、そういう意味でも全国1位だろうと思います。14件出して10件の採択ということで、非常に成績が良かったということなので、少し報告させていただきます。

大学名	人社系	理工農系	医療系	計
大阪大学	3 (4)	7 (9)	(1)	10 (14)
東京大学	1 (4)	5 (7)	1 (3)	7 (14)
京都大学	1 (2)	3 (6)	2 (2)	6 (11)

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ採択件数。()は応募件数

◆競争的資金等の獲得

次も大型の競争的資金の獲得ですけれども、1番目に関しては、ご承知のとおり東南アジア等で今、鳥インフルエンザによる感染症が大きな問題となっていますが、このプロジェクトのもとに、タイのバンコクに阪大の研究拠点を置くということで、既に準備に入っております。私も、先般、タイ保健省の大臣が会いたいということで話をし、向こうでは鳥インフルエンザが非常に重要な問題になっているので、大阪大学からこういう拠点を置いて支援していただきたいという非常に強い要請がございました。それから2番目は、これは一応東京大学が中核拠点ですが、今、いろいろなところで、持続可能な社会や安心安全な社会の構築というのが大きなテーマとして挙げられておりますが、そのような状況の中で国家プロジェクトとして積極的に大阪大学も参加しているということです。それから3番目、17年度の原子力システム研究開発事業としていくつかのカテゴリーの中で、本学から2件の採択がありました。

◆業務の実績に関する評価結果

法人化になりましてから、国立大学法人評価委員会という組織が立ち上げられ、そこで各国立大学法人の業務実績についての評価を行うことが決まり、16年度の評価を受けました。

その結果ですが、「全ての面において計画どおりに進んでいる」という、高い評価を受けました。ちなみに全ての項目にわたってこのような高い評価を受けているのは大阪大学のほか数校だろうと思います。特に、全体評価として、その重要な評価項目の中に総長のリーダーシップというのが強く求められているようで、ヒアリングの際に強く聞かれたそうです。

私は、総長のリーダーシップというのは、トップダウン的に進めるのではなくて、いわゆるボトムアップで上がってきたものを十分役員会等において検討し、スムーズに進めていくところでリーダーシップを発揮したいということ、を、総長就任以来申し上げてきたわけですが、その点で本当に総長のリーダーシップを発揮しているのかということ

だと思えます。

この時に評価・広報担当副学長の馬場先生が、大阪大学では総長のリーダーシップは、今、申し上げたような形で実現しているんだということをうまく説明していただきました。総長のリーダーシップによる明確な大学経営戦略が打ち出されており、改革に積極的に取り組んでいると、これは評価のステートメントです。先進性と熱意を持って前向きに改革に取り組み、全体としてかなり高いレベルで進展していることから今後大いに期待されるという、評価文書をいただきました。

評価ステートメントは、各大学もホームページに全部公開しており、他の大学の評価も読みましたが、この大阪大学のように高いレベルで進展しているというのは他に見当たりません。

そういう意味で、掛け値なしで阪大は業務評価で非常に高い評価を受けたのだらうと思っています。来年度も再来年度も同じような評価を受けるべく努力していくつもりでございます。

◆司法試験合格率

以前、新聞にも出ていました司法試験の合格者数ですが、新聞ではこの合格者数でランキングされます。ですから当然、受験者の多い早稲田大学が一位で、二位は東京大学と、こうなるわけです。

それで今度は、私から合格率で調べてほしいと担当に指示いたしました。すると大阪大学は8%で、1位の早稲田大学は、たくさん受かっていますが合格率だと4.2%で大阪大学の半分ほどになります。見方を変えたと司法試験でもずいぶん頑張っているなど、例えば昨年は、大阪大学の合格率は、順位は4位でしたけれども、今年は1位になって8%と改善されたということです。今申し上げたように、法人化になりましてから、いろんなところで、そのランキングというのが噂されるわけです。

平成17年度 司法試験最終試験大学別合格率									
順位	大学名	平成17年度				平成16年度			
		出願者数	合格者数	(順位)	合格率	出願者数	合格者数	合格率	順位
1	大阪大学	705	57	6	8.09%	811	45	5.55%	4
2	東京大学	3,131	225	2	7.19%	3,378	226	6.69%	2
3	京都大学	1,668	116	5	6.95%	1,964	147	7.48%	1
4	名古屋大学	468	32	9	6.84%	520	26	5.00%	6
5	一橋大学	794	51	7	6.42%	912	57	6.25%	3
6	北海道大学	507	30	10	5.92%	563	16	2.84%	13
7	神戸大学	654	30	10	4.59%	711	33	4.64%	7
8	東北大学	642	29	12	4.52%	737	29	3.93%	8
9	慶應義塾大学	3,021	132	3	4.37%	3,382	170	5.03%	5
10	九州大学	535	23	16	4.30%	608	21	3.45%	11
11	早稲田大学	5,379	228	1	4.24%	5,979	226	3.78%	9
12	上智大学	627	24	15	3.83%	727	25	3.44%	12
13	同志社大学	1,326	48	8	3.62%	1,475	30	2.03%	16
14	立教大学	542	19	19	3.51%	576	21	3.65%	10
15	大阪市立大学	394	13	22	3.30%	432	6	1.39%	21
16	中央大学	4,908	122	4	2.49%	5,465	121	2.21%	15

これは、良い悪いは別として、我々はつき合って行かざるを得ないということになります。

◆世界から見た大阪大学の評価

そこで、世界でのランキングはどうなっているかという

ことですが、今、世界の中で、そのユニバーシティランキングというので、主に二つの指標が用いられています。

ひとつはアカデミックランキングワールドユニバーシティというのがございます。もうひとつはタイムズのランキングというのがあり、他大学の学長といろいろな会議で会いますと、この話が出て、そちらの大学は何位ですかなど話題に出ます。

そこで見ると、例えばハーバードが1位です。ケンブリッジが2位、3位がスタンフォード、東京大学が20位、京都大学が22位、大阪大学が62位、東北大学が73位と、東京工大は93位です。

一方タイムズのランキングですが、やはりハーバードが断然トップですね。東京大学が昨年12位から今年16位になり、京都大学が同じように29位が31位に、東京工大が51位だったのが今年99位と、大阪大学は去年が69位だったのが今年は105位に、100位から少し出ていることになります。

何故そういうことが起こっているのかというと、その評価の中で一番のウエイト、大体40%のウエイトを持っているのが、ピアレビューですね。そのピアレビューというのは各研究者に大阪大学をどう思いますかということで、アンケートを配って国際的な研究者の評価を得るということになっているようです。

その時に評価の点数として東京大学はピアレビューの点数が73、京大が57、阪大が28ということで、だから少しこれが上がるだけで、ランキングが10や20すぐ上がってしまうということになっています。気にしないとはいえ、やはり100位以内に入ることが、ひとつの目標だと思うのですが、そうした時に、大阪大学の活動を海外に知らせることが、先ほど申しましたピアレビューにつながり、重要な評価ファクターということになってくると思います。

国大協の調査もございます。国会議員の方々の間で、国立大学はたくさん税金使っているが、世界の中で100位に入っている大学はほとんどないではないかということが噂されました。そこで国大協はそんなことでは困るということで、実際、国大協がチーム作りをして調べ、東京大学が12位、京都大学が32位、大阪大学が34位ということでした。

国大協の調べでは肉薄しておりまして、これは論文数やいろいろなことが非常に重要な役割をなしているわけです。ちなみ論文数を、教員の人数で割るとこれは逆転します。ですからいろんな要素がありますが、国大協でもこういうランキングがあるということです。

何故このようなことを気にするかというわけですが、最近、海外から大学間交流協定をしたい、学生を送りこみたいという時に、やはりこのランキングをみんな見てるんですね。

で、あなたの大学の順位はどのくらいという話があるものですから、同じようにつき合っていく以上、少しいろいろ上げたいということで、100位以内に返すように努めたいと思っています。

◆学内の施設整備（福利棟、石橋キャンパス待兼山周辺等）

次に、学生、教職員の福利厚生施設の整備について少しお話ししたいと思います。

私は学生・教職員の生活環境は極めて大切だと思っています。そういう意味で、この問題に積極的に取り組んでいるつもりですが、いい学生を集めるにしても、また入学した学生が気持ちよく勉強し、研究するということを考えた場合に、とりまく環境が非常に大切だと思っています。

そこで、これはひとつの例ですが、本部の建物の横に、新しいカフェテリアを作りました。名前は「匠」（たくみ）とつけ、専門家のデザイナーを入れて作りました。このように少しグレードの高い福利厚生施設を作るといことは、法人化前はなかなか難しかっただろうと思いますが、これを作るにあたって実際大学生協にお願ひし、大学生協もその際、アメリカの大学のカフェテリアの様子について調査していただきました。

是非大学にお越しの際にはお寄りいただきたいと思ひます。この中にベーカリーを置きまして、焼きたてのパンも販売し、好評を得ています。



次に、石橋の待兼山周辺の整備です。きっかけは、名誉教授の先生からの手紙でした。その先生は、知り合いの親御さんから子供を大阪大学に進学させようと思って見学に行き、石橋から阪大へ上がって行く坂道を通った感想として、あの道を何とか綺麗にしてほしいと言われたと、こういう手紙をいただいたのです。

そこで、整備計画を思い切ってやろうということで、医短のあったところには、駐輪場を構えて、桜と他に木をたくさん植えて遊歩道のようにしようということです。石橋のところのアプローチを、石を敷いたアプローチにしたいと思っています。

いわゆる大阪大学のアカデミックな雰囲気を感じてもらえるようにしたいと考えております。実はこれは突貫工事をお願いしまして、平成18年の4月の入学式には間に合うように工事を進めております。

◆大阪大学フォーラム（ベトナム国立大学ハノイ校）

次は、先ほど言いましたように大学のランキングを上げようと思えば、ピアレビューが大事だということで、国際推進といいますか国際交流を積極的に行い、海外の方に知

ってもらふことが肝心ということで、この阪大フォーラムは、岸本前総長の時にスタートされたプログラムです。第一回は米国のNIHでバイオ関係のフォーラムが行われ、第二回は、欧州の確かドイツ（注：ミュンヘンルートヴィヒマクスミリアン大学）だと思ひますが、ナノ関係のテーマで行いました。第三回は、スイスのローザンヌで生命機能と情報科学の融合であるバイオインフォマティクスをテーマにして行い、それから第四回は、平成16年にフランスのストラスブールで人文社会系の「日本人のもう一つの顔」というタイトルで日本文化の紹介を行いました。いずれも盛況でした。



第五回は、平成17年9月27日から29日にベトナムの国立大学ハノイ校で行いました。テーマは究極と統合の新しい基礎技術というCOEのテーマのひとつですが、それを中心に行いました。そこでは、副首相までこのフォーラムに出席していただき、ベトナムの国を挙げての行事だったという印象を受けました。

大阪大学フォーラムとして、特に東南アジアで最初にベトナムを選んでくれたことに関して、非常に向こうは喜んでいただいたと思ひます。

◆大阪大学海外拠点（オランダ・アメリカ合衆国）

これも海外活動の一環としておこなったものですが、オランダのグローニンゲンに大阪大学のセンターを開設いたしました。グローニンゲンといいますのはオランダのアムステルダムから電車で2時間ほど北に行ったところで、非常に小さな町です。

そこにグローニンゲン大学がございまして、1614年の創立で400年近い歴史を持っている由緒ある大学です。当日は、大阪大学から50名ほど、それからグローニンゲン大学から100名を超える参加者で開催しました。オランダの日本全権大使もわざわざアムステルダムからグローニンゲンまで来て、このフォーラムに参加して挨拶をいただきました。

何故、このグローニンゲンにセンターを置いたのかということですが、これまで阪大と核物理研究の面でかなりの協力体制があったのですが、それに加えて、この大学の中に、大学独自に日本文化センターというのを持っており、日本の研究を非常によくしているわけです。そういうとこ



ろと我々は交流協定を強くしたいということがひとつの目的でして、その日本文化センターがあるところに、我々のセンターを置いて事務職員を常駐させています。

やはりヨーロッパの大学の歴史というものを感じ非常に圧倒されました。そういう意味で、我々はここを拠点としてそのEU等の大学間交流について進めていきたいと思えます。

次に、サンフランシスコセンターは既に作ったことを前にお話しましたが、そこでの活動ということで、ひとつは、平成18年1月7日に、ここサンフランシスコセンターにおいて米国在住の阪大の卒業生の方々に集まっていた交流会を開きます。調べたところ全米に400人くらい大阪大学の卒業生の方がおられて、今、そのうち200人くらいのひとと連絡が取れるようになっています。そういう活動も大阪大学のサンフランシスコオフィスを通じてやっていたいという事です。

◆大阪大学同窓会連合会

それから、大阪大学同窓会連合会が発足しました。これは、平成17年7月25日の天神祭船渡御で阪大船を出した際に、その船上で発足式を行いました。この同窓会連合会というのは各部局の同窓会はそのまま堅持し、各同窓会の更なる発展に資するような連合体にするということです。その会長には熊谷信昭元総長、副会長には金森順次郎元総長、

医学部名誉教授の松本圭史先生にそれぞれお願いしました。

今後、法人化になって、やはりこの同窓会というのを非常に大切に、大学の支援部隊になっていただく必要があると思いますし、今ある同窓会のアンブレラという意味で、同窓会連合会というのをつくったわけです。

◆大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

それから、以前に大阪大学コミュニケーションデザイン・センターというのを新しくつくったことを申し上げました。それは、どういう理念で作ったかということですが、現在、科学技術政策というマクロな意思決定の場面から医療、福祉、教育など個々の臨床的な現場意思決定の場面まで利害や立場の異なる、その当事者の間のとりわけ異なる専門家の間、専門家と非専門家の間に、その双方が十分に理解し合えるためのインターフェイスの仕組みが欠落していると言えます。

そのコミュニケーション不全のために、様々な問題が生じているということを背景に、コミュニケーションというものをデザインして、正しくコミュニケーションを取れるような、例えば、患者さんと正しくコミュニケーションが取れるようなお医者さんを育てたいというようなことから発想いたしました。

それが平成17年の4月からスタートしております。たとえば夏季には「科学技術コミュニケーション」教育プログラムというのを実践しまして、演劇手法を使った対話ワークショップを全学の大学院生ならびに、市民を対象に開催しました。

参加者からは、こんな授業の在り方があったのかということで大きな驚きと賞賛の言葉をいただきました。それからさらに連携して、関西サイエンスフォーラムという、これは関西経済同友会と連携したのですが、市民のための科学技術ということで、いわゆる科学技術と社会との接点を求めて、いろいろコミュニケーションデザイン・センターの活動をしているということでございます。

以上、最近の活動についてご紹介させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。



医学部保健学科 大阪大学高度医療教育講座「医療マネジメントセミナー」を開講

医学部保健学科では、11月1日(火)から11月29日(火)までの間の8日間、大阪大学中之島センターにおいて大阪大学高度医療教育講座「医療マネジメントセミナー」を開講いたしました。

本セミナーは、医療施設管理運営関係者(病院長、看護部長、事務長、各部門長他)を対象にしたもので、27施設27名の参加を得、医療マネジメントを行うに当たって必要な、①医療の質の《見える化》—日本版ホスピタリストの役割、②医療の質管理:プロジェクト・マネジメントの観点から、③医療マネジメント革命:品質の可視化と問題解決アプローチ、④医療技術開発と標準医療:医療の質の視点に関するそれぞれのテーマで、包括的で体系的な教育と問題解決能力を養うことを目的として開講したものです。

講師には、本学から杉原 茂大学院国際公共政策研究科教授、浅田孝幸大学院経済学研究科教授が、また、外部からは川渕孝一東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授、宇田左近マッキンゼー・アンド・カンパニープリンシパル、村上雅義財団法人先端医療振興財団常務理事など、医療経営や管理学のエキスパートを迎え、毎回最新の成果に基づいた講義・演習が行われました。



浅田教授による講義

受講者は、小グループに分かれた演習でそれぞれのテーマについて各職場における問題点など活発に討議を繰り返すなど、医療を取り巻く問題の深さとテーマに対する関心の高さが伺えました。

最終日には、閉講式が行われ、受講者に対し修了証書が授与されました。

(医学部保健学科)

国際交流会館地域交流会を開催

国際交流会館地域交流会が、11月29日(火)に豊中キャンパスのカフェテリア「らふおれ」において開催されました。

当日は、来賓として在阪総領事館から5か国6名の副総領事・領事をはじめ、地域支援団体、地元小学校校長・教諭、自治会役員、ボランティアグループの方約40名の出席がありました。学内からは、総長・副学長はじめ関係者



馬頭琴の演奏

約40名、国際交流会館居住者約160名の計約240名が参加しました。

最初に、国際交流会館長の宮原秀夫総長から協力・支援について感謝の挨拶があり、入居者を代表して文学研究科外国人招へい研究員のヤン・シーコラさんから流暢な日本語でスピーチがありました。続いて、在大阪大韓民国総領事館の教育担当領事の朴泰佑氏から乾杯の発声がありました。また、留学生のハイルニサさんと特別出演でプロダンサーとして活躍中の佐久間ウィヤンタリさんによるインドネシア ジョグジャカルタの古典舞踊、留学生の玄聖姫さんによる中国吉林省延辺朝鮮族自治州民謡、留学生ホトランガさんによる中国内モンゴル自治区の馬頭琴及び民謡が披露され、いずれも素晴らしい内容で盛んな拍手を受けていました。

会場では、来賓及び在館者と本学の関係者との懇談の輪ができ、和やかな雰囲気になった交流会となりました。

入居者からは、日頃接する機会の少ない自国の領事や大阪大学理事等と身近に懇談できる機会となり、印象深かったとの感想が聞かれました。

(研究推進・国際部国際交流課)

基礎工学部技術職員研修（第12回）実施

基礎工学部では、「基礎工学部技術職員研修（第12回）」を11月29日（火）に基礎工学部会議室において行いました。この研修は、教室系技術職員に対し、大学における技術職務全般についての視野を養わせ、その立場と責務を自覚



させるとともに、自己及び相互啓発の機会を与えて、職員の資質と技術の向上を図り、職務能力の増進を促すことを目的に実施したものであり、研修会には基礎工学部をはじめ、大学院情報科学研究科、極限科学研究センター、太陽エネルギー化学研究センターから計16名の技術職員の参加がありました。

当日は、西田正吾学部長による開講式に始まり、続いて総合学術博物館の江口太郎館長を講師に迎えて特別講演「 ^{129}Xe NMR とマイクロ細孔のキャラクタリゼーション」、工作センターの宮本浩之技術職員を講師に迎えて招待講演が行われました。午後からは、元大学院基礎工学研究科助手の森住明弘氏を講師に迎えて特別講演「技術を学んだ者のこれからの生き方を考える」が行われ、その後受講者による活発な技術発表が行われました。最後に、宮崎文夫研修実行委員会委員長から修了証書の授与が行われ、研修を無事修了いたしました。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

平成17年度基礎工学研究科 英語カリキュラム入学式挙行

英語による科目履修及び研究指導により修士号及び博士号を取得できる基礎工学研究科英語カリキュラム博士前期及び後期課程の入学式が、11月30日（水）に基礎工学研究科A棟2階会議室において挙行されました。

式では、関係者20名が出席し、英語カリキュラムWG主査である田谷正仁副研究科長の司会のもと、西田正吾研究科長から式辞があり、平成17年4月及び10月に入学した6名（4名は欠席）によるスピーチを行いました。最後に、出席した基礎工学研究科執行部、各指導教員、英語カリキュラムWGメンバーとともに記念写真を撮影し、終了しました。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）



博士学位記授与式挙行

12月1日(木)医学部銀杏会館において、博士学位記授与式が挙行されました。

今回の授与式は、8月2日(火)から11月22日(火)までの間に学位の授与が決定された92名(課程博士59名、論文博士33名)に対するもので、宮原秀夫総長から出席者一人ひとりに学位記が授与されました。

(総務部総務課)



理学研究科『第7回理学懇話会』開催

理学研究科では、12月1日(木)に千里阪急ホテルにおいて、第7回目となる「理学懇話会」を開催しました。本懇話会は、企業等の幹部として活躍中の理学部卒業の方々に委員をお願いして参加していただくもので、理学研究科における教育・研究等の情報を積極的に開示して、研究成果の企業等における利用や共同研究等の産学連携の糸口を探るとともに、大学院教育や理学的基礎研究に対する外からの要望や提言を受けて、これを本研究科の教育・研究に反映させ、双方にとって有益な活動とすることを目的として、平成11年に設置したものです。今年は17名の委員の方々の参加を得て、本研究科からは27名の教員が出席しました。

懇話会の席上では、本研究科の3名の教授から最新の研究についてそれぞれ紹介があり、続いて「大学院の将来構想—博士課程の教育—」として、小谷眞一研究科長及び企業の委員の方から講演が行われました。

また、意見交換の時間には活発な質疑応答があり、懇話会終了後に行われた懇親会では、和やかな雰囲気のもと、いつまでも話が尽きませんでした。

(大学院理学研究科・理学部)



懇親会で挨拶をする小谷研究科長

平成17年度大阪大学中堅職員財務会計研修実施

法人化に伴う初めての試みである会計系の中堅職員を対象とした学内財務会計研修が、11月29日(火)から12月2日(金)までの4日間にわたってコンベンションセンターを会場として行われました。

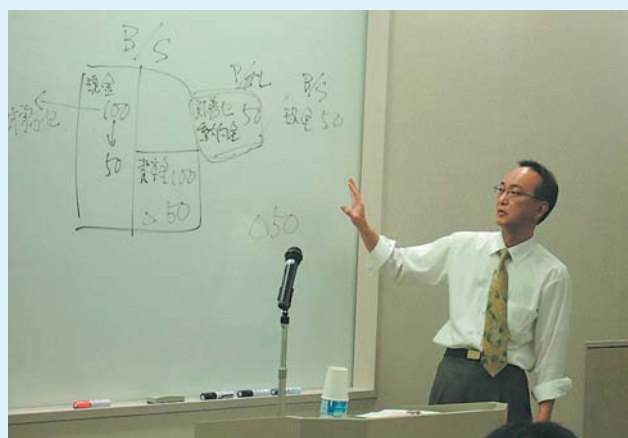
本研修は、国立大学法人会計基準をマスターすることにより国立大学法人職員としての資質向上を図ることを目的とし、学内対象職員38名が受講しました。

研修は、河野正俊財務部長による講話「財務マネジメント」に始まり、文部科学省大臣官房会計課総務班猿渡政範主査による講演「会計基準策定の経緯」では、『国立大学法人法』を題材に財務会計を含めての国立大学法人制度の趣旨説明がなされ、受講生は興味深く聞き入っていました。

研修の主目的は「会計基準」の徹底的なマスターであり、公認会計士による2日間の集中講義が行われ、また、演習1「決算シミュレーション」では各受講生が大学法人の財務諸表を作成するなど決算実務を疑似体験し、決算と財務諸表に関する理解を深めていました。

最終日には、財務部各担当係長による「大阪大学の会計制度」、「入札と予定価格」、「政府調達制度」、「外部資金」、「会計検査」など中堅職員必須の各論講義も行われ、演習2において論文「国立大学法人の会計職員として考えること」を提出して全課程を全員が修了しました。

(財務部財務課)



猿渡主査による講演



理学研究科外国人留学生懇親パーティー開催

平成17年度理学研究科外国人留学生懇親パーティーが、12月2日(金)豊中キャンパスの福利センターにおいて開催されました。

パーティーは、菊池和憲留学生担当教員の司会のもと、小谷眞一研究科長の開会挨拶、村司辰朗豊中ロータリークラブ会長の挨拶に続き、則末尚志評議員の発声による乾杯で始められました。本年も国際交流活動の盛んな地域クラブからの参加を得て、外国人研究者、指導教員、チューター学生及び国際交流に理解のある教職員・学生78名が参加して、留学生にとって日頃接することの少ない方々とも懇談する良い機会となりました。

留学生を代表して、NGUYEN VAN HIEU氏(D3・ベトナム)が謝辞を述べ、このあと留学生、外国人研究員のユーモアを交えた自己紹介に会場は大いに湧きました。また、恒例のビンゴゲームによるプレゼントの抽選会では、学内の国際交流支援サークルBSPメンバーの学生が進行し、



小谷研究科長の開会挨拶

いつもの盛り上がりを見せ、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深め、盛会のうちに閉会となりました。

(大学院理学研究科・理学部)

微生物病研究所・タイ保健省医科学局 新興・再興感染症に関する共同研究の覚書を締結

微生物病研究所は、タイ保健省医科学局（DMSc）と共同で、タイ国立予防衛生研究所（NIH）内に、新興・再興感染症制圧に向けた「日本・タイ感染症共同研究センター（RCC）」を設置し、共同研究体制を構築するための覚書を12月3日（土）大阪大学中之島センターにおいて締結しました。

本共同研究は、文部科学省が実施する「社会のニーズを踏まえたライフサイエンス分野の研究開発—新興・再興感染症研究拠点形成プログラム—」の一つとして採択された「新興・再興感染症制圧に向けた国内外連携研究拠点形成」プロジェクトの一部として実施されます。

RCCでは、新興・再興感染症に対する疫学的研究、診断法の開発、ワクチン開発等の共同研究を行うとともに、日本及び東南アジアの若手感染症研究者の人材育成を図ります。本共同研究により、タイにおける地域密着型の感染症発生、対応状況を把握できるばかりではなく、その情報



覚書き締結後：握手する Pajit Warachit タイ保健省医科学局長（左）と木下タロウ微生物病研究所長

は我が国の感染症対策にも多大の貢献をなすことが期待されています。

（微生物病研究所）

第2回ソウル大学・京都大学・大阪大学合同薬学シンポジウム開催

第2回ソウル大学・京都大学・大阪大学合同薬学シンポジウムを、12月4日（日）、5日（月）、6日（火）、大阪大学大学院薬学研究科にて開催いたしました。このシンポジウムは、3大学間の若手薬学研究者の意見交換の場として、平成16年度よりスタートしたシンポジウムで、毎年1回各大学持ち回りで開催されることとなっております。昨年度の京都大学をうけて、本年度は本学主催で、「Future



シンポジウムの開会を宣言する山元 弘薬学研究科長

Aspects of Biopharmaceutical Sciences」をテーマとし、生物系薬学を中心としたシンポジウムを企画しました。また、本学薬学研究科と韓国全南大学薬学部との交流協定に基づき、全南大学から2名の演者をお招きしました。

4日は、ホテル阪急エキスポパークにて歓迎会を行い、長旅の労をねぎらうとともに、互いの研究のバックグラウンドを紹介するなど楽しい時間を過ごしました。5日、6日は、薬学研究科特別講義室におきまして、全南大学からの2演題を含め、合計34題の発表がありました。各演題発表後に多くの質問が飛び交っただけでなく、演題の合間に、共同研究も視野にいれた議論も行われ、迫力のあるシンポジウムとなりました。また、学部4年生の中にも熱心に発表に耳を傾ける者もあり、彼らの科学者としての今後の成長・発展に期待させられました。

シンポジウムは、来年度はソウル大学の主催で行われますが、シンポジウム開催後、不幸なことに、ソウル大学でのサイエンス論文ねつ造疑惑が報道されました。健全な科学の上にしか、健全な大学間国際交流は成立しません。信頼できる友人であり続けてほしいと思います。

（大学院薬学研究科・薬学部）

平成17年度リーダーズ・アセンブリーの開催

本年度のリーダーズ・アセンブリーが、12月3日(土)から一泊二日の日程で、学生105名及び教職員7名の参加により、ユニトピアささやま(篠山市)において開催されました。

本研修の目的は、体育系学内学生団体のリーダーである主将・主務等が一堂に会し、課外体育活動の意義及び諸問題を検討するとともに、講演及び講習等を通して、リーダーシップの向上及び課外活動の活性化を図り、加えてお互いの理解・親睦を深めることです。本年度は、「七大戦を意識した強いチーム作り」及び「安全管理」の二面をテーマとしました。

一昨年度から、勝負に勝ち抜くための精神的、身体的能力向上を目指すことを大きなテーマとして取り組んできましたが、来年度は七大戦の主管校となるため、七大戦強化プロジェクトリーダーの橋詰 謙医学系研究科助教授から論理的かつ具体的な強化策の講話がありました。

また、奇しくもこの日が優勝決定の日となったガンバ大阪など著名なスポーツ団体をクライアントとしている企業の講師を招き「強いチームを創る、モチベーションマネジメント」を演題にリーダーのあるべき姿の講演がありました。

もう一方のテーマである安全管理面では、本学安全衛生管理部から山本 仁助教授を招き、クラブを統率するリーダーとしての責任や対処についての指導が行われたほか、怪我や事故への対応として、篠山市消防本部署員による「救急講習会」を実施し、従来の心肺蘇生術に加えて、近く本学に設置予定の「AED」の取扱いのほか、三角巾による応

急措置の講習が行われました。

班別討議では第1議題を「課外活動における安全管理について」、第2議題を「クラブ内の懇親会における飲酒方針とアルコールハラスメント対策」とし、参加学生の活発な討議及び全体討議が行われ、盛会裡に終了しました。

急措置の講習が行われました。

なお、初日の懇親会には宮原秀夫総長の出席を得て会場は大いに盛り上がり、来年度の七大戦の主管校を記念して体育五賞に新たに「宮原賞」を創設することが総長から披露され、この盛り上がりはピークに達しました。宮原総長は、各クラブを代表して熱い決意表明を行ったひとりひとりと親しく交歓し、その後も学生の総長詣ではひきもきりませんでした。応援団からエールが送られた後、宮原総長を中心に全員で肩を組んで会場一杯の円を描いて全寮歌を合唱し、学生との交流と意志疎通に大変意義深いものとなりました。とともに学生にとっては七大戦では必ずや優勝して宮原総長を胴上げする決意を新たにするに十分な合宿研修となりました。

(学生部学生支援課)



懇親会風景(決意表明を行った各クラブ主将等と懇談する総長)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が、12月5日(月)に基礎工学部シグマホールで開催されました。本学では人権問題啓発行事の一環として、毎年7月及び12月に講演会を開催しており、12月是人権週間にちなみ開催しています。

今回は、近畿大学人権問題研究所の北口末広教授を講師に迎え、「部落問題の今—人権の時代を切りひらく」と題して実施しました。

当日は、約80名の教職員・学生の参加があり、参加者は最後まで熱心に聴講し、大変盛況な講演会となりました。

(総務部総務課)



内視鏡手術トレーニング講習会開催

“患者さんに優しい”手術として、内視鏡手術は、近年、爆発的に普及しています。小さな手術創で手術ができることなどが利点ですが、その反面、外科医にとっては特殊な



第1回講習会トレーニング風景（阪大病院未来医療センター）

技術を要求されるストレスの多い手術であることも事実です。阪大病院では、従来から院内にトレーニングセンターを設けその技術向上を目指してきました。このたび外科系科をはじめ泌尿器科、産婦人科、脳外科、耳鼻科、中央クオリティマネジメント部などが参画し、内視鏡手術の質の維持向上のため、また院内医師や臨床研修医、医学生教育を目的として、院内にトレーニング講習会を設置しました。

12月17日(土)午後に阪大病院未来医療センターで開催された第1回講習会では、初期臨床研修医10名が、実際の手術で使用する器具を用いて、熱心にトレーニングに臨み、病院長から修了証を受け取りました。

阪大病院では、今後、定期的に講習会を開催し、院内で内視鏡手術を行う医師全員に対象に広げ、さらには近隣病院の医師のトレーニングにも役立つよう計画を進めています。

（医学部附属病院）

基礎工学研究科 外国人留学生年末交流パーティー開催

平成17年度基礎工学研究科留学生年末交流パーティーが、12月8日(木)午後5時30分から福利センター4階食堂（豊中地区）において、約200名の参加者のもと、盛大に開催されました。

パーティーは、熊谷悦生留学生相談室主任の司会のもと、西田正吾研究科長の挨拶、来賓の紹介と挨拶に続き久保井亮一留学生相談室室長の挨拶が行われ、戸部義人評議員の発声による乾杯で華やかに始まりました。本年も留学生相談室の各種事業に貢献した学生、豊中ロータリークラブをはじめとする地域ボランティアの方々に対して、感謝状の贈呈も行われました。

パーティーの途中でベトナムからの留学生がベトナム北



部の伝統舞踊を踊る場面もあり、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深めました。

なお、本パーティーは、日頃お世話になっている地域ボランティア団体・個人、家主、ホストファミリーに感謝するとともに、留学生、Σ留学生会学生、チューター学生及び教職員の親睦を深め、相互交流の輪を拡げることが目的に、毎年基礎工学部留学生相談室を中心に催されているものです。

（参考：基礎工学部留学生相談室 HP

<http://www.kisr.es.osaka-u.ac.jp/>）

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

消防訓練実施

理学研究科では、11月29日(火)豊中市北消防署の指導の下に、総合的な消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、熱感知器発報による模擬火災と初期消火・避難訓練、119番および防災本部への通報訓練、薬品を使用した模擬火災と水消火器・実消火器による消火器訓練、煙発生器による煙体験訓練、ビデオ「危険物 6つの扉～危険物の性状と消火の方法～」の上映をそれぞれ行いました。訓練参加者は教職員・学生等約250名でした。

この訓練は、従来から、秋季全国火災予防運動に因で行っているものであり、又、例年、化学科3年次学部学生に対する化学実験の授業の一環としても実施しているものです。

(大学院理学研究科・理学部)

大学教育実践センターでは、12月1日(木)に豊中市北消防署の指導のもと、消防訓練を実施しました。



薬学研究科では、本年度も秋季全国火災予防の一環として、12月8日(木)薬学研究科テニスコート北側広場において、学生・教職員等あわせて約100名が参加して消防訓練を実施しました。

山元 弘研究科長から「防災・防火に関する心構え、初期消火の必要性」について挨拶があった後、消火器販売業者より、薬学研究科の建物に備え付けてある2種類のABC粉末消火器、CO₂消火器の特徴、使用上の注意及び使用方法の説明があり、引き続き、実際に2種類の消火器を使った消火訓練を行いました。

学生・教職員等の参加者が実際に消火器を持ち、消火器の特徴・特質を体感するとともに初期消火の大切さをあらためて認識し、無事消防訓練が終了しました。

(大学院薬学研究科・薬学部)



実消火器による消火訓練

今回の訓練は、日常における火災に重点を置き、ビデオによる講習、防災防火についての心構え、緊急時の対処法などについての講演が行われ、さらに、屋外において消火器を実際に用いた初期消火の訓練及び屋内消火栓を使用して屋内消火栓放水訓練を行いました。

当日は、高杉英一センター長をはじめ、教職員・学生約30名が参加、講演を熱心に聞き入り、実地の消火訓練では参加者全員が積極的に消火器並びに屋内消火栓の操作に加わるなど防災に対する意識の高揚が伺え、大変有意義なものとなりました。

訓練終了後には、北消防署係員からの講評があり、また、高杉センター長から、同署へのお礼と、参加者に対して今後も火災予防に関して意識の高揚を図るよう挨拶がありました。

(大学教育実践センター)



人間科学研究科・JICA「ペルー・ボリビア教育行政コース」研修実施

人間科学研究科では、独立行政法人国際協力機構（JICA）大阪国際センターの委託を受け、11月24日（木）から12月16日（金）まで「ペルー・ボリビア教育行政コース」研修を行いました。

この研修コースは、ペルー・ボリビア両国の教育行政に関わる人材に対し、日本の教育行政・制度、学校運営管理、教員研修などのノウハウを紹介することにより、両国の教育行政の質向上を伴った効率化に資することを目的とし、平成13年度から毎年実施しているもので、本研究科の内海成治教授をコースリーダーとして、各国5名ずつの研修員が参加しました。

研修では、本研究科での開講式に始まり、学内外の講師による講義、文部科学省、地方教育委員会、公立小中学校及び国立教育政策研究所等を訪問しての講義、視察及び懇談等を行い、幅広く日本の教育行政について学びました。

研修の最後には、ファイナルレポートの作成及び発表を行い、両国が抱える教育行政問題、今後の日本との教育分野における協力の方向性及びペルー・ボリビア両国間の教育分野での協力の可能性等について、熱心な討議が行われ



開講式での集合写真

ました。

最終日には、JICA大阪センターで閉講式を行い、研修員全員に修了証書が手渡され、全日程が無事終了しました。

（大学院人間科学研究科・人間科学部）

平成17年度大阪大学主任研修実施

平成17年度大阪大学主任研修が、12月14日（水）から16日（金）までの3日間にわたってコンベンションセンターで行われました。

本研修は、主任としてのその立場と役割を再認識させ、マネジメントに関する理解を深め、職務に対する応用を図るとともに、自己啓発の指針を確立させることにより職員の資質の向上を図ることを目的として、他機関への出向者（2機関3名）を含む56名（内女性14名）が受講しました。

民間的発想を取り入れる観点から、講義・演習を業者委



託とし、(株)マネジメントサービスセンター日野欣治講師により行われました。

受講生は、外部環境・自組織の現状把握等「我々を取り巻く環境変化」についての講義に熱心に聞き入るとともに、「ゲーム おもしろ村（情報伝達）」「インバスケツ演習（未決案件処理）」、「職場での問題解決」「インタアクションマネジメント（コミュニケーション）」等の演習を、普段と異なる状況設定の下、班別討議・全体討議と行いました。最初は受け身で指示を待つ受講生が多く見受けられましたが、討議を通じ、固定観念にとらわれず発想転換し、適切に対応するなど、活発な意見交換が行われ、全員が意欲的に取り組む姿勢がうかがえました。

研修最終日に「自己啓発計画書の作成」が行われ、各人が、現在の自分の分析、将来のなりたい自分、それを実現するための計画を作成しました。計画書については、講師から上司に見せるよう指示があり、全員とまどいの色は隠せませんでしたが、自己啓発の一端として、報告の決意を固めていたようでした。

本研修には、庶務・会計・教務等分野の異なる主任が受講しましたが、演習の他、休憩時間などを通じて、お互いの親睦を深め合い、全員、所定の課程を無事修了しました。

（総務部人事課）

歯学部附属病院において第6回年末ふれ愛コンサートを開催

歯学部附属病院で、毎年恒例となり、入院患者さんにやすらぎのひとつを過ごしてもらう目的で「年末ふれ愛コンサート」を12月20日(火)に開催しました。

今回も、昨年4月に拡張した新しい待合ホールでコンサートが開催され、医師や看護師に付き添われた患者、家族、見学者が開催前よりつめかけ、熱気に満ちたステージとなりました。ピアノ、バイオリン、サックス、コーラスによるクリスマスソングから映画主題歌、最近のヒット曲、ポップス、クラシックまで幅広いジャンルの演奏やタップダンスが医師や病院職員によって繰り広げられ、患者さんが一緒にリズム楽器を持って演奏したり、医師が楽器を持って客席に入り、患者さんとセッションしたりしました。

どの出し物に対しても、患者さんの鳴りやまぬ拍手があり、最後には出演者や見学者ら全員による「見上げてごらん夜の星を」を看護師のリードで斉唱し、参加者一同が楽しい一夜を過ごしました。

後日、患者さんのアンケートには「とにかく面白かった



です」「手術の前夜をありがとう」「素敵なコンサートをありがとうございました」「とてもいい思い出になりました」と感激の声がありました。

(歯学部附属病院)

大阪大学技術職員研修(第22回)実施

大阪大学技術職員研修(第22回)が、12月19日(月)から12月21日(水)までの3日間、コンベンションセンターにおいて実施され、学内の教室系技術職員25名が参加しました。

今回は「生物科学系」、「物理・材料系」及び「化学系」の3コースで実施され、技術職員が主体となって行われるコース別演習など積極的な参加型の研修として実施されました。



研修内容は、安全衛生管理部山本 仁助教授による「安全衛生管理」、知的財産本部研究財務企画部長正城敏博助教授による「大阪大学の産学連携と知的財産の取り組み」、名古屋工業大学技術部小澤忠夫技術主幹による「技術職員組織」と題した「全体講義」及び、各コース別の職務に必要な専門知識の演習行う「コース別演習」、「コース別技術演習」が行われました。

2日目の施設見学は、大阪市と民間企業からの寄付によって設立された(財)大阪バイオサイエンス研究所を見学しました。そこでは、独創性に富んだ基礎生物科学の分野での新しい問題の解明に力点を置いているという説明に、受講生は熱心に聞き入っていました。

最終日には、工作センター長・理学研究科笠井俊夫教授による「真空・低温技術」及び産業科学研究所野地博行教授による「マイクロ加工技術を利用したナノバイオテクノロジー」と題した「全体専門講義」が行われました。

受講生は、この研修を通じて職場で実践できる貴重な専門的知識を修得しようとする意欲にあふれ、最後まで熱心な質疑応答が行われ全日程の研修を無事終了しました。

(総務部人事課)

産学連携・特許講習会受講の事務職員が知財検定2級を受検、94%が合格

知的財産本部では、12月15日(木)と1月17日(火)、産学連携・特許事務講習会(初級編・後期)を実施しました。この講習会は、産学連携・特許に関する事務を担当する事務職員に必要とされる知識・技能(法律、制度等)の修得、向上を目的として昨年度から開始され、今年度は、秋に実施した初級編・前期に続いて行われました。

1日目の12月15日には、社団法人発明協会の佐々木勝彦統括特許流通アドバイザー・参事による特許契約・共同研究契約の基礎知識についての講義があり、2日目の1月17日には、新日本監査法人産学連携推進室の江戸川泰路マネージャー・公認会計士から利益相反・責務相反について、弁護士法人淀屋橋・山上合同の藤川義人弁護士・弁理士から学生の研究活動と知的財産・守秘義務について、それぞれ講義が行われました。

受講者は、類似した契約用語の違いや、最近、注目を集めている利益相反等のトピックについて講義を受け、終了後の受講者アンケートからも満足度の高さが窺われました。また、初級編・前期の修了試験として受講者18名全員が



講義中の江戸川泰路マネージャー・公認会計士

知的財産検定2級を団体受検しましたが、その結果について知的財産教育協会から通知があり、2級、準2級合格を合わせ94%(全国平均77%)という高合格率であったことが判明しました。

(知的財産本部)

ビデオ英語・英会話研修実施

本学の国際交流が活発化するなか、外国人教師・研究員・留学生等の受け入れ関係事務の増加に伴い英語を使用する機会がますます増え、その対応ができる職員の育成をねらいとして、平成17年度のビデオ英語・英会話研修が10月6日(木)から1月25日(水)まで、計15回(1回2時間)にわたり、本学大学院文学研究科博士後期課程の足達賀代子



さんを講師として、参加者6名により事務局会議室・コンベンションセンター研修室で行われました。

この研修は、放送大学が開設している「英語Ⅲ」の教材及びビデオテープを利用し、実用英会話の中でも特に聴解力を修得させるとともに、足達講師による基本会話の講義・演習及びオランダのグローニンゲン大学(大阪大学海外拠点事務所)へ1年間常駐職員として派遣された研究推進・国際部学生交流推進課学生交流企画係主任の木本陽子さんによる海外研修体験談報告(1時間)などを盛り込んだ総合的な語学学習方式で実施されました。

研修生は、4ヶ月にわたる同講師の熱心な指導と研修生自身の努力によって、各人の英語能力も当初より格段に向上しました。

最終日の研修終了後、同会議室で閉講式が行われ、6名全員が同講師から英文の修了証書を授与されました。

(総務部人事課)

講演会「高等教育の国際標準化」

2月14日(火)、13:30-16:00、工学研究科 GSE コモン・イースト棟5階会議室2において、標記講演会が開催され、工学研究科の国際教育に関心を持つ17名の教職員が出席しました。工学研究科では昨年9月20日に、「教育の質保証」に関するフィンランド使節団を迎えて交流セミナーを開催したことがきっかけとなり、昨年12月評価室員の甲斐泰教授、長谷川和彦教授がフィンランドの大学を訪問することになりました。訪問先のどの大学においても、ポーニャ・プロセスへの対応を急いでいる状況を目の当たりにし、大学教育の国際標準化が法人化後の日本の国立大学においても急務であるとの感を強めて帰国しました。

今回の講演会では、大学評価・学位授与機構の吉川裕美子助教授による「ポーニャ・プロセスへの欧州諸国の対応から学ぶこと」と、留学生センターの有川友子助教授による「北米スタンダードによるFDを通して考える」の2つの講演をお願いしました。

吉川先生の講演では、まずわが国の高等教育における最近の動向が述べられ、就学・就業行動の多様化、グローバルな学生・労働力の移動、大学設置基準・設置認可の弾力化などに伴って、高等教育における学位・単位の質保証が必要となっている現状が説明されました。ついでヨーロッパの統合に伴い高等教育政策についても共通の課題と認識されることになり、ヨーロッパ高等教育システムの国際競争力に対する共通の危機感から、1999年のポーニャ宣言が生まれたことが説明されました。このようなことから、わが国においても学位の通用性・互換性を図ることが重要であるが、そのためにはどのような教育課程を組み立てていくべきか、またその質保証は、といったお話がなされま

した。

有川先生の講演では、カナダのマギル大学におけるFDワークショップにおいて、参加者のTeachingとLearningについての考え方の変革を目指すこと、学習がCognitive（認知）だけでなくAffective（感情）を意識した教授法が効果が上がることなどが話されました。さらに、大阪大学で過去2年間、教育の国際化を目指すFDワークショップに実際に取り組んだ経験から、その意義と課題について解説されました。FDワークショップ参加者が核となって、大阪大学における教育の国際化を目指すFD活動が活発に展開されることを期待したい、と述べられました。

工学研究科では、PBL教育、JABEE、工学教育、工学英語など教育の国際化に取り組んでいる教員が多く、予定の時間を超えて活発な意見交換がなされました。

(大学院工学研究科・工学部)



左から久保教授、長谷川教授、有川先生、吉川先生、甲斐教授

平成18年度大学入試センター試験実施

平成18年度大学入試センター試験が、1月21日(土)・22日(日)の両日、全国721試験会場で一斉に実施され、本学では、豊中、吹田の両キャンパス、大阪青山大学及び千里金蘭大学の10試験場において実施されました。

今年の志願者総数は、全国で551,382人、本学では4,370

人の志願者が受験しました。

今年から英語リスニングテストが導入され、本学でもICプレーヤー等の故障による再テストが4試験場で実施されましたが、無事終了しました。

(学生部入試課)

少林寺拳法部 世界大会女子弐段三人掛けの部 優勝!



昨年10月に行われた世界大会において、少林寺拳法部の岡地理佳さん・徳永美和子さん・吉松聖葉さん組が見事優勝を勝ち取りました。世界大会は4年一度開催され、参加国数は21ヶ国と規模の大きな大会です。

三人掛けの部とは、実際に勝負をする試合を行うわけではなく、演武という突き蹴りや投げ技などを色々組み合わせて、一つの流れにして実践を想定して行うものです。

優勝という称号を手にした彼女たちからは勝者がもちがちな驕りなどは微塵も感じられず、逆にさらなる高みへの意志が満ちあふれていました。この偉業を契機に、少林寺拳法部の勢いが加速することは間違いありません。

(学生部学生支援課)

七大学総合体育大会(冬季大会) スキー競技 優勝!

1月6日(金)に七国立大学総合体育大会のスキー競技が行われ、阪大が優勝しました。このスキー競技は毎年行われているもので、今回優勝すれば5連覇を達成することもある、高いモチベーションで試合に臨みました。途中までは東京大学にリードを許していたものの、女子の活躍により終盤には首位に躍り出て、最終的には総合で優勝を勝ち取り、5連覇の偉業を達成することができました。

今後の七大戦各競技の活躍に期待がかかります。

七大学総合体育大会(春季大会)の日程、会場について

● 馬術の部

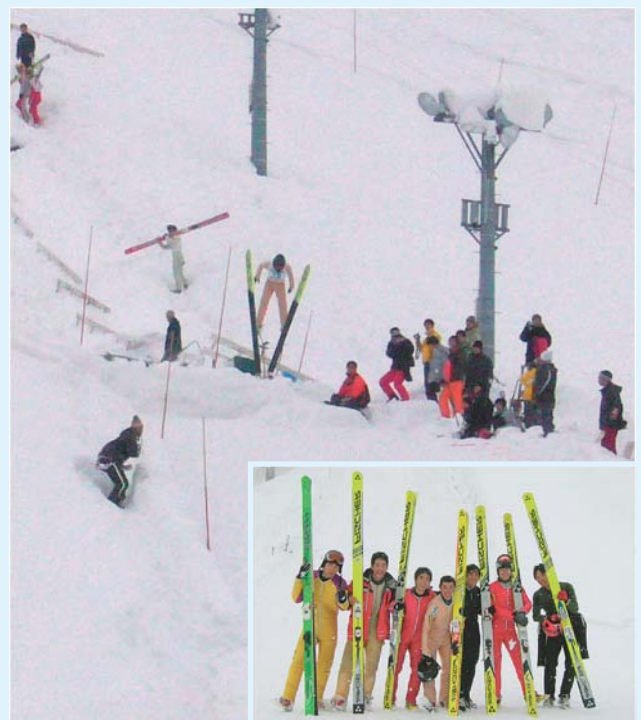
日程：平成18年3月3日～4日

会場：福岡県馬術競技場（福岡県古賀市）

● 航空の部

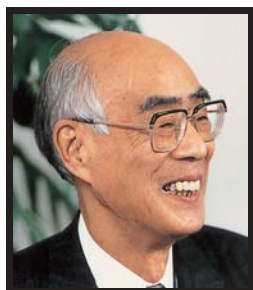
日程：平成18年3月13日～22日

会場：千葉県関宿滑空場（千葉県野田市）



(学生部学生支援課)

田中 整爾名誉教授(法学部)逝去



本学名誉教授田中整爾先生は、かねて病氣療養中のところ、平成17年10月12日(火)、肺癌のため逝去されました。享年78歳。

先生は、昭和2年1月7日兵庫県に生まれ、昭和25年3月京都大学法学部法律学科を卒業後、昭和25年9月大阪大学大学院に入学、同大学院研究奨学生(前期)及び同研究奨学生(後期)を経て、昭和30年4月大阪大学法学部助教授に採用され、昭和41年3月同教授に昇任、昭和62年3月に退職されました。この間、法学部長、評議員等を歴任し、法学部及び大学院法学研究科はもとより大学全体の充実・発展に寄与され、昭和62年4月に名誉教授の称号を授与されました。

先生は、本学を退職後、大阪学院大学教授に就任し、法学部長を務め、また、同大学大学院法学研究科の初代研究科長として、同大学の拡充・発展に貢献され、平成14年3月に定年退職された後も研究生生活を継続して研究に情熱を傾けられました。

この間、永年にわたって、後進の育成に献身的な努力を傾注さ

れ、門下から、社会有意の人材を多数世に送り出し、数多の民法学者、裁判官や検察官、弁護士など実務法曹を育成され、また民法に関しては、物権法を中心に契約関係や損害賠償などの財産法のみならず家族法に至るまで、幅広い民法の全領域をほぼ網羅する多くの優れた研究を公表して、その学術上の深化・発展に寄与されました。

その真骨頂は、戦後民法学の金字塔の一つと評されている占有に関する研究であります。占有はローマ法やゲルマン法に遡り、かつ民法全般に亘る重要な制度であり、その研究の必要性が強く意識されながら、数多の難問を抱え民法の迷宮と評され、また本格的な研究がほぼ皆無の状況にありました。先生はこれに敢然と挑戦され、ヨーロッパの理論展開を丹念に追跡して、理論的考察を加え、わが国の実情を踏まえ、それに適合する客観説と称する解釈論を構築され、その集大成として、昭和50年に「占有論の研究」を上梓されました。これにより、わが国の占有論は世界的水準に伍しえたこととされ、同52年に京都大学から法学博士の学位を授与されました。その後も占有の研究を継続され、最高裁判決もその理論を採用するなど、先生は、理論的にも実践的にも顕著な功績を挙げられました。

また、大学の外においても、日本私法学会の理事として活躍され、大阪府地方労働委員会公益委員、川西市においては公害等紛争処理委員会会長や環境保全審議会副会長の重責を担い、また家庭裁判所での家事調停(大阪家庭裁判所所屬家事調停委員)や池田市では婦人問題の懇談(池田市婦人問題懇話会会長)に参画するなど、社会的貢献にもご尽力されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

池上 禎造名誉教授(文学部)逝去



本学名誉教授池上禎造先生は、ご自宅において平成17年12月14日(水)老衰のため逝去されました。享年94歳。

先生は、京都府にお生まれになり、昭和8年3月京都帝国大学文学部文学科をご卒業の後、同副手、第三高等学校講師、同教授、京都大学分校教授、同教養部教授を経て、昭和40年7月大阪大学文学部文学科に新設された国語学講座の初代教授として着任されました。昭和49年4月に

定年退官され、大阪大学名誉教授の称号を授与された後、同年同月より南山大学教授にご就任、昭和56年3月に同教授を退職されました。昭和49年6月には、京都大学名誉教授の称号も授与されておられます。

先生は、国語学の分野において、広い範囲の研究を深く進められました。学生時代に執筆された「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」が有名であり、有坂秀世氏の研究と合わせて、有坂・池上法則(古代日本語における音節結合の法則)と呼ばれています。この論文を初めとする上代語や音韻の研究、漢語に決してとどまらない著書『漢語研究の構想』(岩波書店)があり、文字・表記に関する研究、近世語・近代語の研究、言語生活・言語生活史の研究など、多くの論文があります。こうした研究を基に、学生の教育、後進の指導にも努められました。また、国語学会の創設に尽力され、設立発起人から評議員、理事を歴任され名誉会員となられました。さらに、国語審議会委員を4期8年務められたことも特筆されます。以上のように国語学関係の各方面に多大な貢献を果たされました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

大政健史助教授が「11th Symposium of YABEC2005、Most excellent poster presentation award」受賞

大学院工学研究科生命先端工学専攻の大政健史助教授が、国際シンポジウム YABEC2005 において、「Most excellent poster presentation award」を受賞しました。このシンポジウムは、アジアの生物化学工学に関する 50 歳以下の若手研究者によって開催されており、今回で 11 回目となります。

今回は 141 件の発表から 5 件の Most excellent poster presentation award が選ばれました。対象となったのは、「Construction of suitable cell line and system for cell based simulator for drug evaluation」で、マイクロリアクターを用いた薬物代謝評価システムの構築に関する研究で受賞しました。

なお、受賞式は 10 月 25 日(火)開催の YABEC 2005 (北京)にて行われました。

(大学院工学研究科・工学部)



増原宏教授、佐々木孝友教授、森勇介助教授、細川陽一郎研究員 「第21回 光産業技術振興協会 櫻井健二郎氏記念賞」受賞

大学院工学研究科の増原 宏教授、佐々木孝友教授、森 勇介助教授、細川陽一郎科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業研究員が、「第 21 回 光産業技術振興協会 櫻井健二郎氏記念賞」を受賞しました。

櫻井健二郎氏記念賞は、電子総合技術研究所・電波電子部長であり光産業技術振興協会・理事であった故櫻井健二郎氏が光産業の振興に果たした功績を讃えるとともに、光産業および技術の振興と啓発を図ることを目的として創設された荣誉ある賞です。

受賞は『フェムト秒レーザーパルスによる蛋白質の結晶化』に関するもので、評価理由は、レーザーアブレーションの分光学的研究及び分子論的メカニズムの研究と、低過飽和溶液中での有機結晶核の発生制御研究の成果に基づき、高出力フェムト秒レーザーパルスを蛋白質溶液に集光することにより結晶化を図る全く新しい方法を考案し、蛋白質の高品質な結晶化に初めて成功したこと及び、本研究はレーザーのバイオ応用に新たな道を開拓しており、蛋白質の結晶解析を通じて生命科学分野に大きなインパクトを与えていることです。

なお、授賞式は 12 月 1 日(木)に、虎ノ門パストラル (東京都港区)で行われました。

(大学院工学研究科・工学部)

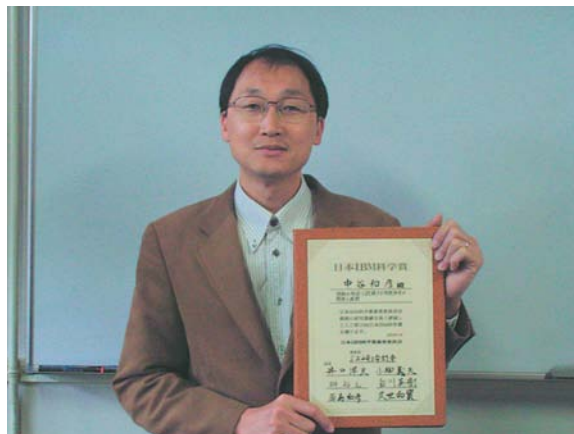


前列左2番目から、伊藤隆一(光産業技術振興協会 専務理事)・田中昭二(櫻井健二郎氏記念賞委員会 委員長)・内田禎二(櫻井健二郎氏記念賞委員会 主査)・増原宏。後列左から、佐々木孝友・森勇介・細川陽一郎(敬称略)

中谷和彦教授「第19回 IBM 科学賞」受賞

産業科学研究所の中谷和彦教授が「第19回 IBM 科学賞」を受賞しました。この賞は、日本の科学分野の学術研究の振興と若手研究者の育成に寄与することを目的に1987年に創設され、国内の大学あるいは公的研究機関に所属して物理、化学、コンピューターサイエンス、エレクトロニクスの4分野における基礎研究で優れた研究活動を行っている45歳以下の研究者5名に贈られるものです。授賞式と受賞講演が11月22日(火)に東京千代田放送会館で行われ、江崎玲於奈審査委員長から各受賞者に記念メダルが贈られました。

(産業科学研究所)



由本陽子助教授「新村出賞」受賞

大学院言語文化研究科の由本陽子助教授が「平成17年度 新村出賞（新村出記念財団）」を受賞しました。この賞は、国語学・言語学およびこれに関連する分野における研究活動、主として公表された研究業績で、言語学の発展に大きく貢献したものを褒賞し、言語研究を奨励・促進することを目的とするものです。由本陽子助教授は著書『複合動詞・派生動詞の意味と統語』（ひつじ書房）によって評価を受けました。授賞式は、11月20日(日)京大会館（京都）で行われました。

(大学院言語文化研究科)



新教授紹介

澤 芳 樹 (さわ よしき)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科内科系臨床医学専攻
専門分野：心臓血管外科、移植医療、人工臓器、再生医療

【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 55. 7 医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
- 56. 7 川崎病院 外科 医員
- 58. 1 大阪府立母子保健総合医療センター レジデント
- 58. 7 大阪大学医学部 研究生
- 58. 8 大阪府立母子保健総合医療センター 心臓外科 医員
- 61.11 医員（大阪大学医学部附属病院）
- 平 2. 3 ドイツマックスプランク研究所 ポストドクトラルフェロー
- 4. 2 大阪大学助手医学部
- 10. 4 大阪大学講師医学部
- 11. 4 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 14. 8 大阪大学助教授医学部附属病院
- 18. 1 大阪大学教授大学院医学系研究科

池 道 彦 (いけ みちひこ)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻環境資源・材料学講座
専門分野：生物・生態環境工学、生物資源工学、水質管理工学

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学工学部環境工学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻
博士前期課程修了
- 62. 4 久保田鉄工(株)（現 ㈱クボタ）水処理技術部
- 平 2. 4 大阪大学助手工学部
- 5. 5 博士（工学）（大阪大学）
- 9. 4 大阪大学講師工学部
- 10. 3 ドイツ・ドイツ・ハンプルク・ハーブルク工科大学
客員研究員（平11.1まで）
- 10. 4 大阪大学講師大学院工学研究科
- 11. 8 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 18. 1 大阪大学教授大学院工学研究科

中 前 幸 治 (なかまえ こうじ)

大学院情報科学研究科



所 属：大学院情報科学研究科情報システム工学専攻
専門分野：集積システム診断学

【略歴】

- 昭52. 3 大阪大学工学部電子工学科卒業
- 54. 3 大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻前期課程修了
- 57. 3 大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻後期課程修了
- 57. 3 工学博士（大阪大学）
- 57. 4 大阪大学助手工学部
- 平 3.12 大阪大学講師工学部
- 4.12 大阪大学助教授工学部
- 18. 1 大阪大学教授大学院情報科学研究科

新教授紹介

井 上 康 志 (いのうえ やすし)

大学院生命機能研究科



【略歴】

- 昭62. 3 大阪大学工学部応用物理学専攻卒業
- 平元. 3 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻
博士前期課程修了
- 元. 4 日本電信電話株式会社通信網総合研究所研究員
- 7. 3 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻
博士後期課程修了
- 7. 3 博士（工学）（大阪大学）
- 7. 4 日本学術振興会特別研究員
- 9. 6 大阪大学助手工学部
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 14. 4 大阪大学助教授大学院生命機能研究科
- 18. 2 大阪大学教授大学院生命機能研究科

所 属：大学院生命機能研究科生体ダイナミクス講座

専門分野：ナノフォトンクス、計測工学

猿 倉 信 彦 (さくら のぶひこ)

レーザーエネルギー学研究センター



【略歴】

- 昭62. 3 東京大学工学部物理工学科卒業
- 平元. 3 東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻
修士課程修了
- 元. 4 日本電信電話株式会社基礎研究所社員
- 4. 4 理化学研究所フォトダイナミクス研究センター
光物性研究チームフロンティア研究員
- 8. 2 岡崎国立共同研究機構助教授分子科学研究所
機器センター
- 9. 4 岡崎国立共同研究機構助教授分子科学研究所
分子制御レーザー開発研究センター
- 10. 7 博士（工学）（東京大学）
- 18. 1 大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター

所 属：レーザーエネルギー学研究センター
パワーフォトンクス研究部門

専門分野：レーザー工学・光科学

東風西風

電子と光

名誉教授 塩澤俊之



電子と光は現代の科学技術の重要なキーワードであり、一般によく知られた概念です。通常、原子や分子の大きさほどの微小な空間内における運動を問題にしなくてもよい場合には、電子は粒子として取り扱うことができます。このような古典論的近似のもとでは、物質から取り出された電子は空間内を自由に運動することができ、その運動状態あるいはエネルギー状態を変えることによって光を生み出す源となります。一方、光は波動として空間内を自由に伝わるだけでなく、電子の運動あるいはエネルギーの状態を連続的に変化させることができます。このような概念で捉えた電子と光を対象として、大阪大学を退官する間際の一昨年（2004年）の1月、ライフワークとして長年温めてきました英文著書『Classical Relativistic

Electrodynamics - Theory of Light Emission and Application to Free-Electron Lasers』をドイツの学術出版社シュプリンガーから出版しましたので簡単に紹介させていただきます。本書は、物理学上級コースのシリーズの1冊として書かれたもので、現代物理学の基礎理論である、マクスウェルの電磁理論とアインシュタインの特殊相対性理論の基本から出発して、一步一步着実に議論を積み重ねることにより、光の速度に近い高速度で運動する電子と光の相互作用、ならびに、このように超高速度で走行する電子から高輝度の光が発生するメカニズムを体系的に論じています。

それでは、本書で展開されている物理学の理論はどのような所で役に立つのでしょうか。まず、赤外線、可視光線、紫外線ならびにX線など（専門的には、これらはすべて電磁波という概念で捉えられますが、以下では、簡略のために、これらをまとめて広義の光と呼ぶことにします）の高輝度の光源を得るための基礎理論を提供しています。例えば、光の速度に近い速度で運動している電子の軌道が磁石による磁気力によって急激に曲げられると、電子軌道の湾曲部の接線方向に鋭い指向性をもつ高輝度の光（シンクロトロン放射光）が発生します。このとき得られる光は、従来のレーザーでは得られない優れた特性をもち、新しい生命科学、先進医療技術、化学反応の過程の解明、固体物理学、分子生物学、ナノスケールの超微細加工などの最先端の研究分野における強力な研究手段となっています。具体的には、シンクロトロン放射で発生する短い波長のX線を使うと、物質・材料の微細な構造を分子、原子のレベルで明らかにすることができます。このようにして、ハイテク材料の半導体や超伝導材料あるいは各種タンパク質のミクロなレベルでの構造解析が可能になりました。また、シンクロトロン放射で得られる非常に明るい光を、露光時間を極端に短くして、生体細胞や化学反応を行う物質に照射することにより、測定対象に大きな影響を与えることなく生命現象や化学反応の過程を詳しく観察することができるようになりました。この技術を応用すれば、新しい生命科学や先進医療技術の飛躍的な発展が期待できます。

一方、宇宙の彼方から地球に降り注ぐ高エネルギーの素粒子は、水中を水中における光の速度よりも大きい速度で運動する電子から放出される光（チェレンコフ放射光）を観測することによって検出されます。例えば、ノーベル賞を受賞された小柴昌俊博士のグループは、宇宙からやってくるニュートリノと呼ばれる素粒子が水の分子を構成する水素原子の原子核に衝突する際に放出される高速の陽電子から放射される光を観測することによって、この素粒子の検出に成功しました。さらに、上に実例を示しました2つの放射機構（シンクロトロン放射とチェレンコフ放射）を利用して、従来のレーザーに比べてより優れた特徴をもつ自由電子レーザーと呼ばれる新しいレーザーが実現されました。自由電子レーザーの主な特徴としては、高い出力が得られること、波長の短い紫外線やX線が得られること、1台のレーザーで広い範囲の波長をカバーできる（波長可変である、すなわち与えられた広い波長の範囲内で発振波長を自由に変えられる）こと、レーザーを動作させるために外部から供給されるエネルギーに対する放出される光のエネルギーの比（エネルギー変換効率）を高くできることなどが挙げられます。自由電子レーザーから得られる光は、シンクロトロン放射光と同様の分野で利用することができますが、前者は後者に比べてより鋭い波長選択性、より高い光輝度ならびにより高い光エネルギーの利用効率を得られます。

本書は、高エネルギー物理学、加速器物理学、自由電子レーザーなどの分野における世界の中心的な研究機関である CERN（欧州核物理研究機構、ジュネーブ）、SLAC（スタンフォード線形加速器センター、カリフォルニア州）、DESY（ドイツ電子シンクロトロン研究機構、ハンブルク）、KEK（高エネルギー加速器研究機構、つくば）の図書館をはじめとして、米国、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、スウェーデン、オーストリア、イタリア、デンマーク、オランダ、スペイン、ロシア、カナダ、インド、中国、シンガポール、オーストラリア等の多くの国々の大学図書館あるいは公共図書館に収蔵されています。特に、世界のトップ100大学の中では、約40の大学（マサチューセッツ工大、カリフォルニア工大、プリンストン大、オックスフォード大、コロンビア大、シカゴ大、エール大、コーネル大、東京大、トロント大、スイス連邦工大、エディンバラ大、大阪大、ハイデルベルク大、ウプサラ大、ウイーン大ほか）の図書館に、また、世界の代表的な公共図書館では、大英図書館、米国議会図書館、フランス国立図書館、ロシア国立図書館ならびにドイツ国立図書館などにも取り入れられています。

ところで、アインシュタインの特殊相対性理論が1905年に発表されてから、昨年（2005年）でちょうど100周年を迎えました。1905年には、アインシュタインは、特殊相対性理論の他にも、光量子仮説と光電効果、ブラウン運動という20世紀の物理学の発展に大きな影響を与えた重要な概念を発表しています。この節目を記念して、国連総会では2005年を「国際物理年」（International Year of Physics）と定め、世界各地でいろいろなイベントが開催されました。この記念すべき「国際物理年」と相前後して本書を出版できたことは著者としてこれに過ぎる喜びはありません。本書が、電子による光の放出という物理学の基礎理論に留まらず、応用面から見ても極めて重要な問題の考察を通して、アインシュタインの相対性理論の本質をより深く理解するための一助となればと願っております。相対論的電磁理論の中でもとりわけ興味のあるトピックスの一つである、光の速度に近い高速度で運動する電子と光の相互作用、ならびにこのような超高速度で走行する電子による高輝度の光の放出について関心のある方には、是非ともご一読いただければ幸いです。

Nature Medicine掲載論文にかかる教員の処分等について

昨年5月に論文データねつ造等の不正が判明しましたこの件に関して、大阪大学では2月15日に記者会見し、調査内容、関係教員の処分等について公表いたしました。大阪大学では、今回の事態を非常に重大なことで受け止め、研究倫理の遵守と再発防止の徹底を教職員、学生に注意を促すため、総長見解を表明することとしました。

総 長 見 解

論文データねつ造などによる不正論文の作成、出版は大阪大学における研究の根幹を揺るがすものであり、大学としてあってはならないことで社会的責任を痛切に感じております。

研究における公正さの確保は科学の進展における大前提となることは言うまでもありません。特に科学の推進の重要な担い手としての社会的役割と責任を持つ大学における学問研究にみじんだりとも不正な行為があってはなりません。今回の事案は、これまでの大阪大学の教育研究に対する信頼を失墜させ、本学の名誉を著しく傷つけたものであり、誠に遺憾に思う次第です。

このような事案が再び起こることの無いように、研究者の研究倫理や良心の自覚のみならず、学生に対する倫理意識、社会規範等の教育指導に全学を上げて取り組み、本学に対する社会的信頼の回復に努めていく所存です。

平成18年2月15日

大阪大学総長 宮 原 秀 夫

日本医療機能評価機構の最新基準 (Ver.5.0) を達成 “安全で質の高い医療”認定

医学部附属病院が安全で質の高い医療を患者様に提供していることが、財団法人日本医療機能評価機構から認定されました。

同機構は第三者的な立場で、患者様の視点に立ち、医療機関の様々な機能を評価しています。医学部附属病院が審査を受けたのは昨年の10月で、同機構から7人の調査員が訪れ、3日間にわたり書類審査と面接調査が行われ、更に外来棟、病棟や薬剤部、臨床検査部門など全部門を視察し、183項目について評価し、全ての基準を達成し認定されたものです。

医学部附属病院は、5年前にも評価基準を達成しているとの認定を受けてから、患者様中心の医療を実現するために、病院の理念と基本方針を分かり易く改正し、「患者の権利」も明記しました。一方、医療の安全と質に関しては中央クオリティマネジメント部を中心に充実を図ってきたことが、今回のさらに厳しい基準による審査を受けての認定でありました。

(医学部附属病院)



平成18年度懐徳堂古典講座 受講生募集

I. 基本コース

◆ 中之島会場 (18:00～19:30)

コース名	講師名	原則曜日
アーネスト・ヘミングウェイを読む	森岡 裕一 (大阪大学大学院文学研究科教授)	第1火
ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)を読む	玉井 暲 (大阪大学大学院文学研究科教授)	第2火
螺旋の回廊、幸田露伴を読む	柏木 隆雄 (大阪大学大学院文学研究科教授)	第2金
西郷隆盛遺訓を読む	猪飼 隆明 (大阪大学大学院文学研究科教授)	第3火
小津安二郎の映画を読む	上倉 庸敬 (大阪大学大学院文学研究科教授)	第3金

◆ 梅田会場 (18:00～19:30)

コース名	講師名	原則曜日
中国の歴史書を読み解く	串田 久治 (桃山学院大学文学部教授)	第4木
論語を読む	岸田 知子 (中央大学文学部教授)	第4金

II. 集中コース

◆ 中之島会場

コース名	講師名	時間	第1回	第2回	第3回
親鸞を読む	平 雅行 (大阪大学大学院文学研究科教授)	13:00～14:30	8/5(土)	8/19(土)	8/26(土)
上田秋成を読む	飯倉 洋一 (大阪大学大学院文学研究科教授)	15:00～16:30	8/5(土)	8/19(土)	8/26(土)

◆ 梅田会場

コース名	講師名	時間	第1回	第2回	—
学びなおす漢字と漢文	湯浅 邦弘 (大阪大学大学院文学研究科教授) 矢羽野 隆男 (四天王寺国際仏教大学助教授)	14:00～17:00	7/22(土)	7/29(土)	—

【注記】 ●諸事情によりやむを得ず日程等変更させていただく場合があります。ご了承ください。

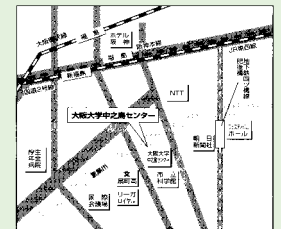
受講料について

コース	受講料(一般)	受講料(会員)	備考
基本	16,000	13,000 (年会費¥3,000を含む)	・受講料は半期単位での納入も可能
集中	中之島会場 4,000 梅田会場 3,000	3,600 2,700	・1回のみ受講も可能 (いずれのコースも1回¥2,000)

※受講料は発行致しませんので、振込み受領証を失くさず保管していただき、1回目の講座の時に受付にてご提示下さい。

【お申し込み・お問い合わせ】

(財)懐徳堂記念会事務局 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内
Tel: 06-6843-4830 Fax: 06-6843-4850 E-mail: Kaitoku@po.aianet.ne.jp
URL: http://www.aianet.ne.jp/~kaitoku/



■中之島会場 〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-93 大阪大学中之島センター



■梅田会場 〒530-0001 大阪市北区梅田1-12-39 新阪急ビル12階スカイルーム

懐徳堂アーカイブ講座2006

【日 時】 平成18年4月8日(土) 13:30～15:30 (受付は13:15～)

【場 所】 大林寺 宝塚市切畑長尾山13番地

【内 容】 講演「懐徳堂に寄与した尼崎屋一族」 講師：元関西大学教授 肥田皓三

【参加費】 無料

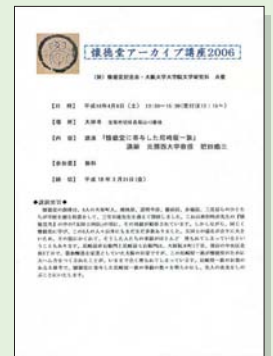
【締 切】 平成18年3月31日(金)

◆講演要旨◆

懐徳堂の創建は、5人の大阪町人、鴻池屋、道明寺屋、備前屋、舟橋屋、三星屋らのひとたちが学校を創る相談をして、三宅石庵先生を迎えて開校しました。これは西村時彦先生の『懐徳堂考』の中の「五同士列伝」の項に、その功績が顕彰されています。しかしながら、同じく懐徳堂に学び、この5人の人々以外にもまだまだ多数ありました。五同士の盛名が余りに大きいため、その陰にかくれて、そうした人たちの事績がほとんど埋もれてしまっているということもあります。尼崎市市右衛門と尼崎屋七右衛門は、大阪榎木町1丁目、現在の中央区北浜5丁目で、醤油醸造を家業としていた大阪の旧家ですが、この尼崎屋一族が懐徳堂のために大へ力を尽くされていたことが、いまだで全く埋もれてしまっています。尼崎屋一族のお墓のある大林寺で、懐徳堂に寄与した尼崎屋一族の事績の数々を明らかにし、先人の余光をしのぶことにいたします。

【お申し込み・お問い合わせ】

(財)懐徳堂記念会事務局 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内
Tel: 06-6843-4830 Fax: 06-6843-4850 E-mail: Kaitoku@po.aianet.ne.jp
URL: http://www.aianet.ne.jp/~kaitoku/



営業路線バス(阪急バス)の新規路線開通について

平成17年12月14日(水)から、阪急電車北千里駅を經由し、千里中央駅と吹田キャンパス（医学部附属病院～本部事務局～歯学部附属病院）を結ぶ路線バス（阪急バス）が開通しました。

①運行経路概要

千里中央—〔中央環狀〕—〔東門〕—阪大医学部病院前—阪大医学部前—阪大本部前—阪大歯学部病院前（新設）—
—〔西門〕—北千里駅—千里中央

②運行日・運行回数・時間帯

平日のみ 8往復

③その他

既存の路線は現行どおり運行します。停留所、ダイヤおよび運賃等の詳細については、阪急バス株式会社にお問い合わせください。

主要停留所ダイヤ

大田病院線 主要停留所ダイヤ

H17.12.14 現在

千里中央(⑧のりば)	8:30	9:34	10:38	11:38	12:38	13:38	14:38	15:38
北町二丁目	8:35	9:39	10:43	11:43	12:43	13:43	14:43	15:43
青山台四丁目	8:41	9:45	10:49	11:49	12:49	13:49	14:49	15:49
北千里(④のりば)	8:45	9:51	10:55	11:55	12:55	13:55	14:55	15:55
阪大歯学部病院前	8:52	9:58	11:02	12:02	13:02	14:02	15:02	16:02
阪大本部前	8:57	10:03	11:07	12:07	13:07	14:07	15:07	16:07
阪大医学部前	8:58	10:04	11:08	12:08	13:08	14:08	15:08	16:08
阪大歯学部病院前	8:59	10:05	11:09	12:09	13:09	14:09	15:09	16:09
千里中央	9:20	10:26	11:30	12:30	13:30	14:30	15:30	16:30

千里中央(⑥のりば)	10:09	11:09	12:09	13:09	14:09	15:09	16:09	17:09
阪大医学部病院前	10:17	11:17	12:17	13:17	14:17	15:17	16:17	17:17
阪大医学部前	10:18	11:18	12:18	13:18	14:18	15:18	16:18	17:18
阪大本部前	10:23	11:23	12:23	13:23	14:23	15:23	16:23	17:23
阪大歯学部病院前	10:24	11:24	12:24	13:24	14:24	15:24	16:24	17:24
北千里	10:40	11:40	12:40	13:40	14:40	15:40	16:40	17:40
青山台四丁目	10:42	11:42	12:42	13:42	14:42	15:42	16:42	17:42
北町二丁目	10:49	11:49	12:49	13:49	14:49	15:49	16:49	17:49
千里中央	10:56	11:56	12:56	13:56	14:56	15:56	16:56	17:56

(総務部総務課)

『キャンパス環境 ご意見箱』開設! あなたの声が明日のキャンパスを創る!

『キャンパス環境 ご意見箱』が開設されました。

建物、キャンパス環境・美化、交通安全等に関するさまざまなご意見、ご要望等がございましたらこちらまで！



キャンパス環境 ご意見箱

建物、キャンパス環境・美化、交通安全等に関するさまざまなご意見、ご要望等がございましたらこちらまで！
 必要事項を記入の上、「送信」ボタンをクリックしてください。
 *印の項目は必ず入力してください。

年齢	☐ 10代 ☐ 20代 ☐ 30代 ☐ 40代 ☐ 50代 ☐ 60代 ☐ 70代以上
性別	☐ 男性 ☐ 女性
属性	☐ 阪大学生 ☐ 阪大教職員 ☐ 阪大周辺にお住まいの方 ☐ その他
主な活動エリア	☐ 豊中キャンパス ☐ 吹田キャンパス ☐ 豊中・吹田両方 ☐ その他
本文のタイトル	
*本文(200文字程度)	
送信 リセット	

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/administration/facilities.html>

(施設部企画課)

今回は、大阪大学にシンボリック空間を作ろうと、ビッグなプロジェクトに取り組んでいる学生グループを取材しました。

阪大に大きな花時計 —華時計プロジェクトの活動—

基礎工学部 4年生

岡 卓 史

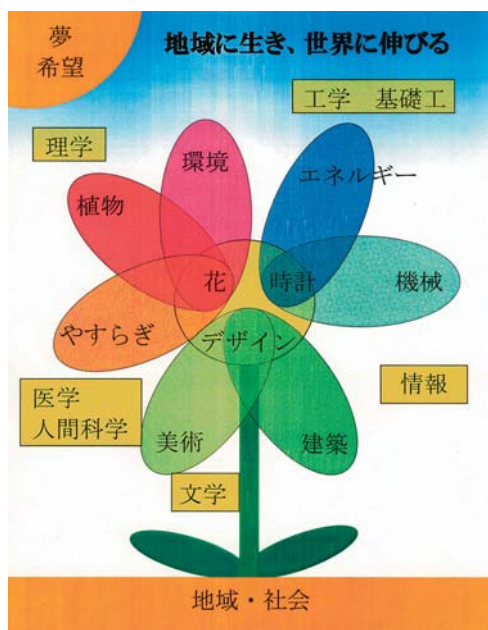
華時計プロジェクトって。

僕たちは、もともと「より大きな目的のために行動する」をモットーに、地域におけるボランティア、キャンパスの環境美化等の活動をしていました。また、ただ自分たちが満足するだけではなく、大学内にも進んで社会貢献や奉仕活動を行う文化を築いていきたいと思っていました。

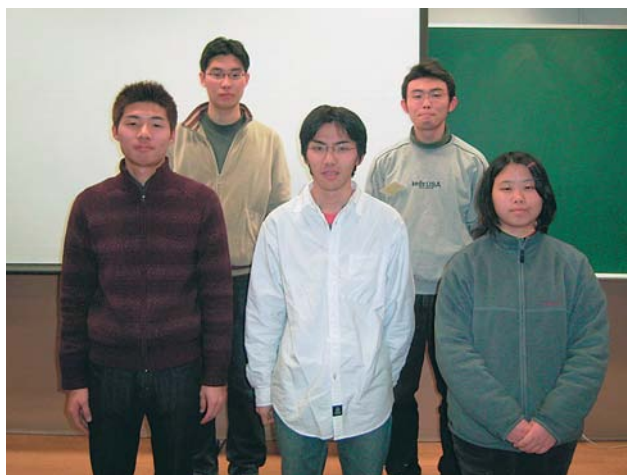
そういう中、阪大のシンボルとして花時計を作ろうという案が出ました。僕たちもキャンパス作りに積極的に関わりたと思っていましたし、シンボルを作ることで、学生も大学に対してさらに誇りと愛着を持てるはずだと思いました。また、地域の人たちにとっても憩いの場となるものにしたいと考え、取り組み始めました。

ちょうどその時が課外研究奨励費の募集時期で、多くの先生方の協力を得て、「大阪大学キャンパスにおけるシンボリック空間—大きな花時計の設置—」というテーマで申請することができました。過去にはないタイプの申請内容でしたが無事採択され、プロジェクトが動き始めました。

実際の活動としては、花時計に関する調査から始めました。昨年12月には、学生・教職員の方へのアンケートを実施しました。その時に正式に「華時計プロジェクト」と名付けられました。



花時計イメージ図（課外研究奨励費申請時）



前列左から、小島成輝君（工）、岡 卓史君（基）、池田菜穂子さん（文）
後列左から、倉又泰彦君（工）、井川辰朗君（工）

なぜ大きな花時計？

阪大のキャンパスには、東大の赤門、京大の時計台のようにシンボル（歴史的建造物）が残念ながらありません。阪大の特色は、懷徳堂、適塾を源流とする、創立以来の研究第一主義に基づいた第一線の研究成果と、それに加え、未来を育てリードする先進性です。

そこで大阪大学らしくシンボルを表現する手段として、最先端の研究技術を生かし、さらに未来への希望を時の流れとともに追うことができるものと考え、花時計の設置を思いつきました。

花時計は各学部の最先端の研究成果を反映し、分野の垣根を超えた融合と発展により作成され、大阪大学の叡智を象徴することができると思います。また、四季により常に変化し発展を遂げる花時計ならば、学生や社会、世界に至るまで、広く夢や希望を与えることができるシンボルになると思っています。

花時計を作るには大変な作業が必要では。

花時計を設置するには、大きさ、デザイン、駆動エネルギー、設置場所、設置後の維持管理、土木・造園・設置工事等の検討事項について具体化しなければなりません。

そのために、学内を中心とする専門家の方々に技術要因の確認を含め協議に加わっていただく必要もあります。

まずは、花時計の設置に向けて学生や教職員へのアンケート調査を昨年12月から2月10日まで実施しました。

どんなアンケートを。

大学教育実践センターに協力していただき、アンケート調査表をホームページに掲載させていただきました。また、各部局にも、学生・教職員にメールを一斉送信していただいたり、ホームページから回答できるように協力していただきました。

アンケートは2月10日で終了しており、現在集計中です。2月中にはまとめ、ホームページ等で結果を発表したいと思っています。

また、課外研究奨励費の報告は、今年の4月30日、5月1日に行われる「いちよう祭」で報告する予定です。

アンケートの内容

- 設問1 あなたの主な活動エリア
- 設問2 阪大に愛着は感じますか
- 設問3 阪大や阪大生に対してどのようなイメージを持っていますか
- 設問4 どういうものがあれば、一般の人が阪大に足を運ぶようになると思いますか
- 設問5 シンボリック空間を作ろうと活動していますが、どういう空間を望みますか
- 設問6 このシンボル空間の中に花時計を作ろうと計画していますが、どういうデザインがいいと思いますか。また、どういった阪大の研究が生きるかなど、阪大のオリジナリティーを出すためのアイデアがありましたら教えてください。
- 設問7 管理（花の植え替えなど）にたずさわってみたいと思いますか
- 設問8 （学生の方）大学や社会に対して、どのような貢献活動をしたいと思いますか
- 設問9 （学生以外の方）阪大や学生にどういった貢献活動をしてほしいですか

デザインワークショップにも参加した。

2月に開催された「まちとキャンパスが出会う場所をつくろう！歴史を抱く待兼山と憩いの水辺 デザインワークショップ」（大阪大学キャンパスデザイン室と施設部に、協賛という形で参加させていただきました。

このデザインワークショップは、学生・教職員・地域住



民の方々と協働して、みんなが共有しあえるようなシンボルゾーンをつくりあげることが目標です。

ワークショップへの参加は、今後の華時計プロジェクトの活動に非常に役立つと思っています。



デザインワークショップでのフィールドワーク

今後の活動予定は？

まだまだいろいろな課題が残っており、キャンパス全体を見てどのような空間にするのか、大きさ、デザイン、エネルギー、管理の方法、設計の具体化をしなければなりません。

また、どこまでできるかわかりませんが花時計をシンボルとした緑豊かなキャンパス、「地域に生き世界に伸びる」文化を作るために、学生・教職員・地域の人とともに、キャンパス整備にとどまらず、周辺地域においても様々な活動を続けていきたいと思っています。

最後に華時計プロジェクトに興味をもっている方、一緒に活動したいという方、ご連絡ください。

連絡先 岡 卓史

(E-mail : hana_pro5@yahoo.co.jp)

〈コメント〉

「阪大のシンボル作り」の議論は古くて新しいテーマ。学生が主体になって真剣に考えるというのも阪大ならではのノンアカデミズム気風の表れではないでしょうか。

(デザインワークショップの内容は、阪大NOW4月号で詳しく紹介します。)

“マンチェスター滞在記”

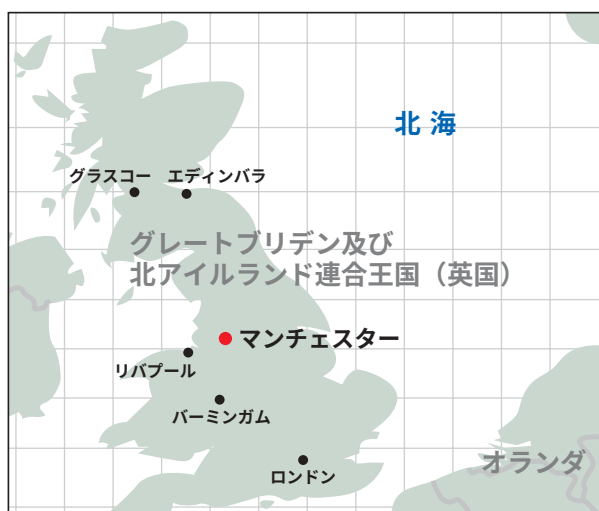
—短期語学研修を受講して—

蛋白質研究所庶務係 — 木 朋 子

平成17年9月15日から12月19日までの3ヶ月間、イギリスのマンチェスター大学附属のLanguage Centreにて、短期語学研修を受講する機会をいただきました。そのときの体験について、紹介させていただきます。

マンチェスター

マンチェスターは、イングランド北部に位置する、ロンドンに次いで2、3番目に大きい都市です。産業革命時には、イギリス綿工業の中心となりました。現在では、ロックバンドOASISの出身地や、サッカーチームのマンチェスター・ユナイテッドの本拠地ということで、街の名を耳にされた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。
(ちなみにここ大阪も、かつて繊維業で栄えし頃は、東洋のマンチェスターと呼ばれていたそうです。)



マンチェスター大学

マンチェスター大学は1851年に創立された、伝統と歴史がある総合大学です。これまでに20名以上のノーベル賞受賞者を輩出し、特に科学技術の分野で数々の功績を挙



マンチェスター大学本部。広大な建物内には博物館もあります。

げています。1948年には現在のコンピューターの原型もここで作られたそうです。学部生の人数は大阪大学の倍ほどですが、その他学科数や大学院生の人数、教職員数は大阪大学と同程度の規模です。

学内には、大きい道路が貫通していますが、吹田キャンパスのように規制はされておらず（そもそも敷地内外を隔てる門壁などありません）、平日はバスや一般車両で交通量は多いです。各学部の校舎や、図書館など大学らしい設備の他に、スポーツジムや音楽コンサートも開けるホールなどもありました。こちらでいうと生協にあたるスチューデントユニオンの建物内には文房具などを売る売店や食堂の他にパブがあり、営業時間中はビールなどのお酒が飲めるようになっています。昼休みに周りを見渡してみると、リラックスして語りあい、ノートを片手に相談する学生の姿は阪大の学食と変わらない雰囲気ですが、その傍らにビールの大きなジョッキが置かれているテーブルが多いのに最初は驚きました。このスチューデントユニオンの建物内にはライブ等もできるスペースがあり、夜にはライブが行われているようで、よくかなり遠くまで重低音が響き渡っていました。



担任の先生とクラスメート（右端が一木さん）

Language Centre での授業

クラスは、初日のテストをもとにレベル別に15名以内で編成されましたが、私のクラスはたまたま人数が少なく、平均6〜7名でした。コースを早く終える方や、逆に途中で入校される方もいるので、メンバーは毎月少しずつ変化していました。

午前中の授業は、2人の担任により、読む、書く、聞く、話すの四要素がバランスよく盛り込まれたテキストを中心に進められました。途中からはテキストと並行して口頭によるプレゼンテーションの練習も行いました。題材も、自分や身の回りに関することから政治や国際情勢等まで幅広く取り上げられており、他国からの留学生と会話練習をしているときに自分の一般知識の乏しさを感じることもありました。

教室での授業ばかりではなく、時にはみんなでモノポリーゲームをしたり、現地のTV局に公開録画の見学に出かけたこともありました。ただ、みんなが期待していた公開録画はあまりにも拘束時間が長かった上、スタジオがとても寒かったのでよい思い出にはなりませんでした。

午後には、リーディングやライティングの授業を受講していましたが、どの授業でも重視されるのは積極的に「話す」ことで、小グループやクラス全員で意見を話す機会が多く設けられました。中東系出身の学生は、いつもすごい勢いでどンドンしゃべるので時に圧倒されたりもしましたが、慣れてくると徐々に自分のペースで話せるようになってきました。

教育委員会の視察検査

12月上旬に、公的な国際文化交流機関 British Council の定期視察がありました。Language Centre が受けている基準認定を更新するためだそうです。現在英国では、留学生として入国ビザを申請する場合、留学先の教育機関が英国の教育省による登録簿に登録されていることが条件となっていますが、British Council 認定の語学学校なら自動的にそこに登録されます。この認定は学校にとっても大変重要なものらしく事前に学生全員に視察検査の日程と内容の案内が配付されました。また、各クラスには、予告無しで委員が授業に視察にくる可能性があるということで、学生のプロフィールや授業計画書をまとめたファイルが毎時間用意されていました。先生方や検査対象に含まれているカフェテリアのスタッフまで皆どこか落ち着かない様子は、会計検査期間中の雰囲気を感じさせました。また視察期間中に一度、各クラスの生徒を集めた聞き取り調査もあり、授業や、宿泊の手配、福利厚生や宗教的配慮まで幅広く質問がされました。

日本語も難しい

私の通った語学学校や、マンチェスター大学本体の外国語学科では、外国語学習にランゲージパートナーとの学習を奨励していました。母国語を話す者同士で、互いに勉強している外国語の学習を助け合うのです。私も、日本語を学習している大学生ダニエル君を先生から紹介してもらい、週に1〜2回程度放課後に会って、勉強していました。

彼からは、授業よりも細やかな実地的なアドバイスを受

けることができ、マンツーマン学習の良さを実感しました。初心者日本語を教えることを最初は簡単だと思っていました。しかし、普段気にせずに使っていた助詞の使い方や辞書の引き方など、英語で表現する以前に日本語でも答えに詰まる質問がたびたびあり、その中にはいまだに答えがわからないままのものもあります。しかしその経験が、間違いを恐れる気持ちから私を解放してくれました。学習を進めていくなかで、例えば、a や the などの定冠詞や前置詞の使い分けがなかなかできないとか、話していても文法等が間違いだらけになるとか、覚えの悪い自分に限界を感じてきていました。しかし、自分が日本語の文法などを完璧に理解していなくても、ちゃんと母国語として日本語を話しています。それなら、英語だって少々間違えてもそれは大した問題ではない、と実感したのです。当たり前のことかもしれませんが、そのことに気が付いてずいぶんと気が楽になりました。

この時期といえば

秋の風物詩をいくつかご紹介したいと思います。10月末の Halloween は日本でも有名ですので、詳細な説明は不要かと思いますが、ただ聞いた話では、イギリスでは10年前に比べるとハロウィーンの人気は下火になってきているそうです。

それよりも規模がより大きく、そのわりに日本ではあまり知られていないものとして、11月5日の Bonfire Night があります。別名 Guy Fawkes Day と呼ばれるこの日が近づくと、街のあちこちで花火が打ち上げられていました。あまりの音の激しさに、最初聞いたときは銃声かと思ったくらいです。さかのぼること約400年、カトリック教徒による国会議事堂の爆破計画事件がもとになっており、11月5日に実行犯の Guy Fawkes が事前に捕らえられて計画が未遂に終わったことを祝うことが起源となっているそうです。花火の他にも子供達がぼろ布などのありあわせの材料で「ガイ人形」を作って、道行く大人達にお小遣いをねだって当日花火を購入する資金にしたり、そのガイ人形などを11月5日にたき火にくべるなどの行事があるそうです。日本では、花火というと夏というイメージがありますが、秋の夜にコートや羽織って見る花火もなかなかでした。規模というなら大阪で見る花火の方が大きく華やかだと思いますが、さほど混雑もなくゆったりとみることができました。



“Trick or Treat?”ハロウィーンの日の帰宅途中、変装した子供達が家々を回っている所に偶然遭遇

ハロウィーンを過ぎると、街はクリスマス一色に変身しました。デパートのウィンドウはもちろん、大学の中や市役所までも華やかに飾り付けられて、見ているだけでも心がはずみました。

イギリスでの食

日本では、イギリスの食事の評判は総じてあまりよくないかと思います。私もごくまれにですが、想像をはるかに超えた衝撃的な味に遭遇しました。しかし、もちろんおいしい食べ物も存在します。

私が、一番おいしかったと感じたのは、ありがちだとは思いますが紅茶とスコーン、それにマフィン類です。特にクリームティと呼ばれるクリームとジャムがたっぷり添えられたスコーンと紅茶の組み合わせは、どこで食べてもおいしくいただきました。

イギリスの名物ともいえるフィッシュアンドチップス、白身魚のフライと山盛りポテトの組み合わせはお値段もお



クリスマス前の市役所。
市役所前の広場では、クリスマスマーケットが開催されていました。

手頃だったので、時折食べていました。ヴィネガーを振りかけた味付けも、慣れればさっぱりとして食べやすく感じました。

マンチェスターには、大きな中華街があり中華スーパーで日本の食材も豊富にそろっています。時折中華料理を食べにいくと、ご飯類などが懐かしく感じほっとしました。ただ、メニューは英語と中国語しかないのも、中国人の友達と一緒にに行かないと注文が大変でした。

現地のスーパーで売られているパック入りのお寿司も食べてみました。もともと期待はしていませんでしたが、これは失敗でした。一見ネギトロ巻きに見えた細巻きの具にパプリカが使われていたことに驚きました。ただ、私たちが日本で食べる外国料理も、本国からみると材料や味付けを食べやすくアレンジされていることが多いらしいので、それは同じことかもしれません。

大学の前の大きな道をまっすぐ歩くと、突然イギリスらしくない、ネオンがまばゆく輝く地区に入ります。通称カレーマイルと呼ばれるこの通りは、1.5キロほどの区間に50軒以上のパキスタンレストランや、インド風の民族衣装や宝石を売るお店それにオリエンタルの食料品店などがひしめいています。ここにいると本当に自分がイギリスにいることを忘れてしまいそうでした。この通りのレストランはお店の競争が激しいため、お手頃価格でおいしいという評判でしたが、日本人にしては珍しく（とよく人に言われます）カレーライスが苦手な私には、この一帯は縁のない地域だと思っていました。しかし一帯の不思議な雰囲気にはひかれ、帰国直前に思い切って挑戦してみました。一番マイルドなカレーとナンは、子供向けカレーのようなただ甘い味ではなく複雑なスパイスの味もしっかりして、かつフルーツの風味も味わえる今まで食べたことのないもので、とてもおいしくいただきました。たぶん、カレー好きな方には物足りない味かもしれませんが、辛いものとカレー風味が苦手な私にとってはちょうどよい一品でした。

期待が裏切られることもあります。先入観を捨ててその土地の名物に挑戦してみると時には当たりがあるものと実感しました。

おわりに

3ヶ月間の研修生活は、予想通り、いやそれ以上に短いものでしたが、非常に充実した貴重な日々でした。語学力は、自由自在に使いこなすレベルまでは、いくらひいき目にみても言い難いですが、それでも開き直って自分なりにコミュニケーションをとる度胸は確実に身に付いたと思います。また、様々な出身国の方々と出会えたことで、多様な価値観や文化に触れることができたことも得難い経験となりました。

大阪大学関係者をはじめとして、多くの方々にご協力いただき、無事に研修を終えることができました。末筆ではございますが、様々な形でこの研修の実施にお力をお貸しいただきました全ての方々に心から感謝し、お礼を申し上げます。

私の本棚

『モーツァルト オペラのすべて』

堀内 修



今年は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの生誕250年の記念年にあたります。(1756年1月27日生－1791年12月5日没、1756年は日本では江戸時代の中頃です。)

日頃、あまりクラシック音楽と接しない人でも、「モーツァルト」の名前はどこかで聞いたことがあるのではないかと思います。また、モーツァルトが作った音楽は意識はしていなくてもどこかで耳にしたことが絶対あると思います。

1991年の没後200年の時もそうでしたが、このような「記念年」となれば、いつもの年よりも様々な関連CDや書籍を見かけるようになるのですが、その中で今年たまたま私が手に取ったのがこの本でした。

オペラ、というどのようなイメージでしょうか？豪華な劇場に着飾った人々、お上品で堅苦しいイメージがあるのではないのでしょうか。この『モーツァルト オペラのすべて』では、現代におけるモーツァルトのオペラについて述べた「二十一世紀のドン・ジョバンニ」、イタリアやドイツそしてモーツァルト以後の作曲家への影響を述べた「オペラ史の中のモーツァルト」、内容を分析した「特別なオペラ」の3つの章でモーツァルトのオペラについての概説を行っており、そのあとに、モーツァルトの35年の生涯で作られた22ものオペラ作品の登場人物やストーリーを順番に解説しています。

「二十一世紀のドン・ジョバンニ」では、まず、現代のモーツァルトのオペラが、どのように上演されているかを例として、代表的な作品の一つ「ドン・ジョバンニ」を挙げて検証しています。原作では、女たらしの悪人で最後には地獄に落ちてしまう若い貴族である主人公ドン・ジョバンニが、ある演出ではうらがなしい吸血鬼であったり、逆に、女たちに弄ばれて哀れな末路をたどったりと、さまざまに変化しながら現在もなお上演され続けていることを挙げて

います。音楽や配役は基本的に元のままで、舞台設定などが変化しながら、現代も変化し続けるこれらの作品は、「オペラ」が単なる作品というだけでなく上演されてこそ命を持つものとして作曲されているからだと著者は語っています。当然、作られた当時の形でも数多く上演されていますが、単に昔の作品というだけでなく、上演されている時代の芸術としての顔も併せ持っているようです。(以前テレビで、UFOに乗って現れる登場人物、ゴジラのような大蛇、はてはスターウォーズのように光る剣での対決シーンといった演出でのモーツァルト



の「魔笛」を見たことがあります。それを見る限りでは、200年前の作品が上演されているとはとても思えません。)

16世紀末のイタリア・フィレンツェで生まれたオペラは、モーツァルトの当時には「芸術と娯楽の王」となっており、当時の文化的言語であるイタリア語で旋律重視の「ナポリ派」と呼ばれるものが中心でした。また、当時のオペラは大きく3つのジャンル、イタリア語による神話や歴史あるいは英雄物語を題材とした悲劇的オペラ＝オペラ・セリア、イタリア語による当時の現代劇(ほとんどが喜劇)のオペラ＝オペ

ラ・ブッフア、ドイツ語による「歌芝居」＝ジグシュビーゲルがありました。「オペラ史の中のモーツァルト」では、モーツァルトが、オペラ・セリアでは「ティートの慈悲」、オペラ・ブッフアでは「ドン・ジョバンニ」、そしてジグシュビーゲルでは「魔笛」といった数々の名作を残し、その後のベートーベンやワーグナーらのオペラ作品にいかにも多大な影響をいかにも与えているかが、作品に込められたテクニックや喜怒哀楽の表現を通して述べられています。

モーツァルトの最初のオペラ作品は10歳から11歳にかけて作曲されたようです。まさに「神童」の面目躍如といったところでしょうか。ただ、この作品などは私はまだ聴いたことがありません。どんなものだったか、一度聴いてみたい気はします。

モーツァルトのオペラといえば、やはり「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「コシ・ファン・トゥッテ」「魔笛」あたりが有名どころだと個人的には思っています。ですが、歌詞の意味も内容もきちんと理解しているわけではなく、組曲的な音楽としてメロディを楽しんでいました。この本を手にとったのは、少しは物語の内容を知ることでもう少し深く楽しめるきっかけになるのでは考えてのことでした。

今年は「記念年」でもありますし、様々なメディアでオペラをはじめとするモーツァルトの作品と接する機会がいつもの年よりあるのではと思います。たまには、ドラマや映画ではなく「オペラ」をご覧になったりするのもおもしろいのではないのでしょうか。また、今年はモーツァルト以外にも何人か生誕・没後の記念年にあたっている作曲家がいますので、その方々の作品も何かの機会にでも聴いてみてほしいなあと、休日限定音楽愛好者な私は思います。

総務部評価・広報課 広報係主任
瀬尾哲也

編集後記

今年の1月7日にサンフランシスコにおいて、大阪大学の北米地区同窓会が設立されました。昨年夏の大阪大学同窓会連合会設立以来、大阪大学で学ばれた方々の注目が、母校である大阪大学に向けられているように感じます。今回のインタビューでお話を伺った、岡 卓史さん達の大阪大学のシンボルとなる花時計を作る「華時計プロジェクト」の活動や、インフォメーションで紹介しましたサークルの活動の様子は、大阪大学と縁のある人たちにとって、より一層「阪大」の変化を感じさせるものだと思います。今後も大阪大学は、「役員室だより」で紹介されているキャンパスマスタープランによるキャンパスの整備等で、ますます学生達が、「学びたいキャンパス」、「語りたいキャンパス」と感じてくれるキャンパスとなっていく予定ですのでご期待ください。

(瀬尾)

レストラン ミネルバ (Minerva)



銀杏会館2階にあるリーガロイヤルホテル直営のレストラン。店名ミネルバの由来はローマ神話に登場する知恵と学問を司る女神。店内にはミネルバの使者ふくろうの置物がある。

フランス料理をベースにした料理はリーガロイヤルの質をなるべく落とさずに、しかもリーズナブルな値段で提供。お勧めはミネルバランチ（日替わり）、ロイヤルランチ（週替わり）。ランチタイムはほぼ満席。ランチタイムは予約する方がベター。

「安くて、美味しいものと最高のサービスを提供することをモットーにしている」という4代目店長の沢谷光司さん。各種パーティーの相談にも応じてもらえる。

毎月第2・4月曜日は女性サービスデー、ランチを注文した方すべてにミネルバ特製デザートが付く。

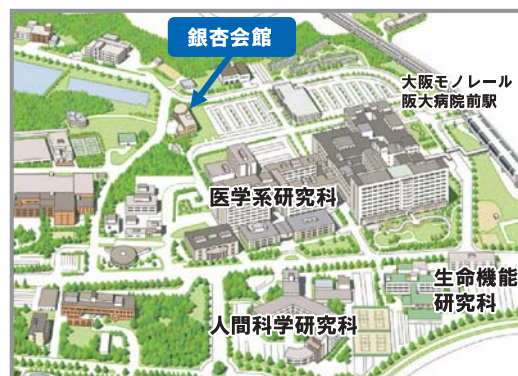
営業時間：11時～14時、17時～20時

定休日：土曜・日曜・祝日

問い合わせ先：06-6879-3605

ホームページ

<http://park21.wakwak.com/~restaurant/>



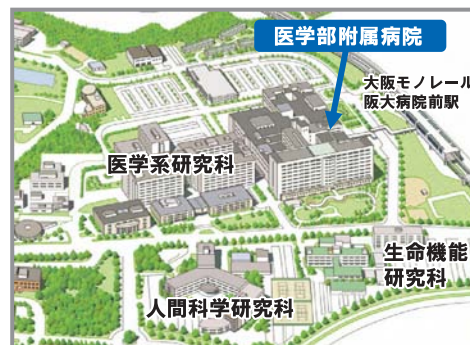
阪大病院にふれあいコーナー ようこそ森林へ！

森林のもつ「癒し効果」への期待が高まるなか、医学部附属病院内に「森林とのふれあいコーナー」が開設されています。

森林に関するパネル写真などが展示され、患者や見舞客が足を止めて見入るなど、ひそかな人気を呼んでいます。

このコーナーは、「森林のリラックス効果を活用して患者さんに癒しの場を提供したい」と近畿中国森林管理局が発案。同病院の協力を得て平成17年7月に開設しました。

現在、「美しい里山 フォトコンテスト入選作品」が展示されています。パネル写真等については約1～2ヶ月でかわります。



交流協定大学紹介

カリフォルニア大学(アメリカ合衆国)

University of California



UC バークレイ

ゴールドラッシュの熱も冷めやらぬ 1868 年にわずか 10 人の教員と 38 人の学生から始まったカリフォルニア大学 (UC) は、今日 20 万人余の学生、12 万人の教職員、134 万人にも及ぶ卒業生を抱え、50 余名にも上るノーベル賞受賞者を輩出する世界有数の大学となっています。それぞれが日本の総合大学のように学長を持ち、学部や大学院を有する 10 のキャンパス (Berkeley, Davis, Irvine, Los Angeles, Merced, Riverside, San Diego, San Francisco, Santa Cruz and Santa Barbara) は、個々に特色がありますが、全体としては法人格を有する一つの大学として運営されています。

1982 年に文学部が UC バークレイ (美術史学科) と部局間交流協定を結んだのを始め、2002 年には大学間交流協定を締結し、教員及び学生の積極的な交流が行われています。理工系大学院生のための夏季語学研修が UC サンタバーバラで実施されているのを始め、サンフランシスコ大地震 100 周年を迎える本年 4 月には、UC バークレイと自然災害に係る APRU / ARARU リサーチ・シンポジウムの共催、12 月には、UC サンディエゴにて医歯薬系 COE グループを中心とした大阪大学フォーラムを開催する予定など、今後も本学との教育研究における交流の広がりが期待されます。

所在地 : 1111 Franklin Street, Oakland,
CA 94607-5200 USA
<http://universityofcalifornia.edu/>



UC サンディエゴ

阪大 NOW No.88 2006 2月号

編集・発行 大阪大学広報委員会 (総務部評価・広報課) 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大 NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail : souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp